

大板井遺跡 30

—福岡県小郡市大板井所在遺跡の調査報告—

小郡市文化財調査報告書 第357集

2023

小郡市教育委員会

序 文

本書は、小郡市大板井における宅地造成に先立って小郡市教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書です。大板井遺跡は大正 12 年（1923）に九州帝国大学（当時）の中山平次郎博士によって『筑後國三井郡小郡村大字大板井の巨石』という論文で紹介された学史的に著名な遺跡で、小郡市の弥生時代中期を代表する拠点的集落であり、これまで周辺でも多くの調査成果が確認されています。

今回の調査では、1 次調査の弥生時代中期の環濠を検出し、大板井遺跡の弥生時代集落の広がりを確認することができました。今回得られた内容が今後末永く活用され、この報告書が文化財愛護思想の普及に寄与することになれば幸いです。

最後に、現地発掘調査にご理解とご協力をいただいた周辺住民の皆様、そして現地作業にあたった地元作業員の皆様など、発掘調査を進める際にお世話になった多くの方々に感謝を申し上げ、序文といたします。

令和 5 年 3 月 31 日

小郡市教育委員会
教育長 秋永晃生

例 言

- 1、本書は、福岡県小郡市大板井に所在する大板井遺跡 30 区の発掘調査報告書である。
- 2、発掘調査は、辰巳開発株式会社から委託を受け、小郡市教育委員会が実施した。
- 3、調査期間は、令和4年4月5日から令和4年6月29日まで実施した。調査面積は 900 m²である。
- 4、遺構実測、遺物の復元・実測・製図には、担当者のほかに三津山靖也、平田太輝、久住愛子、佐々木智子、宮崎美穂子、永富加奈子、牛島真弓、林知恵、佐藤優子ら諸氏に多大なる協力を得た。
- 5、遺構の写真撮影は高橋渉が、遺跡の空撮は（有）空中写真企画、遺物の写真は（有）システム・レコが行った。
- 6、本書で使用する遺構の略号として以下を用いて表示している
SC : 積穴住居 SB : 挖立柱建物 ST : 墓棺墓 SK : 土坑 SD : 溝状遺構 SA : 撫列 SP : ピット
- 7、遺物・実測図・写真は小郡市埋蔵文化財調査センターにて保管・管理している。
- 8、本書の執筆・編集は高橋渉が行った。

目 次

第1章 調査の経過と組織	1 ~ 2
1、調査に至る経緯	
2、調査の経過	
3、調査組織	
第2章 位置と環境	3 ~ 4
1、地理的環境	
2、歴史的環境	
第3章 大板井遺跡 30 の遺構と遺物	5 ~ 40
第4章 総括	41 ~ 43

挿 入 目 次

第1図 大板井遺跡 調査地位置図 (S=1/5000)	3
第2図 周辺遺跡分布図 (S=1/25000)	4
第3図 大板井遺跡 30 I 区 遺構配置図 (S=1/400)	5
第4図 I -A 区 1・2号住居跡 実測図 (S=1/40)	8
第5図 I -A 区 1・2・3・5号土坑 実測図 (S=1/40)	9
第6図 I -A 区 6号土坑 (S=1/40)・1号甕棺墓 (S=1/20) 実測図	10
第7図 I -A 区 6・9号溝状遺構 実測図 (S=1/60)	13
第8図 I -A 区 1・2号柵列 実測図 (S=1/40)	14
第9図 I -A 区 出土土器 実測図 (S=1/4)	15
第10図 I -A 区 1号甕棺 実測図 (S=1/4)	16
第11図 I -B 区 4・8号土坑 実測図 (S=1/40)	18
第12図 I -B 区 9・10号土坑 実測図 (S=1/40)	19
第13図 I -B 区 11・12号土坑 実測図 (S=1/40)	20
第14図 I -B 区 4号・8~12号土坑出土土器 実測図 (S=1/4)	21
第15図 I -B 区 3・4号溝状遺構 実測図 (S=1/60)	24
第16図 I -B 区 4号溝状遺構 土層図 (S=1/60)	25
第17図 I -B 区 4号溝状遺構西側 実測図 (S=1/60)	26
第18図 I -B 区 4号溝状遺構出土土器 実測図 (S=1/4)	28
第19図 大板井遺跡 30 II 区 遺構配置図 (S=1/200)	29
第20図 II -A 区 1・2・3号土坑 実測図 (S=1/40)	33
第21図 II -A 区 2号土坑出土土器 実測図① (S=1/4)	34
第22図 II -A 区 2号土坑出土土器 実測図② (S=1/4)	35
第23図 II -A 区 2・3号土坑、3号土坑出土土器 実測図 (S=1/4)	36

第24図	II-A区 3号土坑、3号土坑下層出土土器 実測図 (S=1/4)	37
第25図	II-A区 1号掘立柱建物 実測図 (S=1/60).....	38
第26図	II-A区 2号掘立柱建物 実測図 (S=1/60).....	39
第27図	I・II区 出土土器、鉄器、石器 実測図 (1~4:S=1/2、5・6:S=1/4).....	40
第28図	大板井遺跡 周辺調査地検出遺構 (S=1/1000)	42~43

表 目 次

表1 大板井遺跡30 出土遺物観察表.....	44~47
-------------------------	-------

写 真 図 版 目 次

写真図版1	① 調査区全景（上空から）	② I区 調査区 全景（上空から）
写真図版2	① I区環濠（4・6・9号溝状遺構）完掘状況（上空から）	
	② II区調査区全景（上空から）	
写真図版3	① I-A区 1号住居	② I-A区 1号住居 東壁土層断面
	③ I-A区 2号住居	④ I-A区 1号土坑
	⑤ I-A区 2号土坑	⑥ I-A区 3号土坑 土層断面
	⑦ I-A区 3号土坑	⑧ I-A区 5号土坑 西壁土層断面
写真図版4	① I-A区 5号土坑	② I-A区 6号土坑 東壁土層断面
	③ I-A区 6号土坑	④ I-A区 1号甕棺墓
	⑤ I-A区 2号溝状遺構	⑥ I-A区 6・9号溝状遺構 西壁土層断面
	⑦ I-A区 6号溝状遺構	⑧ I-A区 9号溝状遺構
写真図版5	① I-B区 4号土坑	② I-B区 8号土坑 土層断面
	③ I-B区 8号土坑	④ I-B区 9号土坑
	⑤ I-B区 10号土坑 遺物出土状況	⑥ I-B区 11号土坑
	⑦ I-B区 12号土坑 土層断面	⑧ I-B区 12号土坑
写真図版6	① I-B区 3号溝状遺構 土層断面	② I-B区 3号溝状遺構
	③ I-B区 3・4号溝状遺構 東壁土層断面	
	④ I-B区 4号溝状遺構 西壁土層断面	
	⑤ I-B区 4号溝状遺構 E-E' 土層断面	

⑥ I -B 区 4 号溝状遺構 D-D' 土層断面 ⑦ I -B 区 4 号溝状遺構

⑧ I -B 区 4 号溝状遺構 最下層土器 出土状况

写真図版 7 ① I -B 区 4 号溝状遺構西側 土層断面 ② I -B 区 4 号溝状遺構西側

③ II -A 区 1 号掘立柱建物 検出状况 ④ II -A 区 1 号掘立柱建物(上空から)

⑤ II -A 区 1 号掘立柱建物 ⑥ II -A 区 1 号土坑

⑦ II -A 区 2・3 号土坑 遺物出土状况 ⑧ II -A 区 2・3 号土坑 土層断面

写真図版 8 ① II -A 区 2・3 号土坑 ② II -B 区 北壁土層断面

③ II -B 区 調査区全景

写真図版 9 出土土器①

写真図版 10 出土土器②

写真図版 11 出土土器③

写真図版 12 出土土器④

第1章 調査の経過と組織

1、調査に至る経緯

小郡市大板井に所在する大板井遺跡は、市内の遺跡の中でも比較的早い時期に本格的な発掘調査が実施された遺跡である。昭和50年代から現在まで29次の調査が実施され、縄文時代から近世にかけての複合遺跡であることが判明している。特に弥生時代中期～後期にかけての集落跡が確認されており、多くの竪穴住居や祭祀土坑が検出されるなど、当時の中核的な集落であったと考えられている。

大板井遺跡30次調査は住宅地建設に先立つて「埋蔵文化財の有無に関する照会」が提出されたことに始まる。これを受け試掘調査を実施した結果、埋蔵文化財の存在を確認したため、発掘調査による記録保存が必要な旨の回答を行った。その後、施工業者と小郡市教育委員会で協議し、令和3・4年度事業として発掘調査を実施し、令和4年度に発掘調査報告書を刊行することで同意を得た。

2、調査の経過

発掘調査は令和4年4月5日から6月29日にかけて実施した。以下、調査の経過を調査日誌から抜粋する。

4/4 現場の視察に行く。調査区の繩張りを行う。4/5～11 I区、表土剥ぎを行う。4/25 トイレとハウスを搬入する。4/26 現場を開始する予定であったが大雨のため中止。大雨で調査区に水がたまる。4/28 現場を開始する。I-B区の調査区は水が溜まっていたため、I-A区の調査区から調査を始める。ビットの掘削と土坑（SK1, 2）、SC1の掘削を行う。5/2 調査区の水が引かないため水中ポンプをつかい排水を行う。5/6 I-A区北側の検出を行う。溝状遺構1条、竪穴住居2軒、土坑3基、小児甕棺墓1基確認。掘削を行う。5/9 I-B区、検出を行う。SK8・9・10検出。5/17 I-B区西側の検出を行う。土坑2基、溝状遺構3条検出。5/19 I-B区北東隅検出。溝状遺構2条確認。杉木課長、現場視察。SD4・6は環濠の可能性があるとの指摘を受ける。5/25 SD8をSD4西側に変更、掘削を行う。またSD4西側部分（旧SD8）については想定していたよりも外側に広がる可能性。掘削の範囲を広げる。5/26 II区の表土剥ぎについて業者と打ち合わせを行う。30日から行うことが決定。5/30 II区の表土剥ぎを行う。II-B区を表土剥ぎするも擾乱がひどく遺構なし。II-A区の表土剥ぎを行い上層は客土（砂層）が厚く堆積、その下に遺構を確認する。土坑2基を確認。5/31 引き続きII区の表土剥ぎを行う。昨日確認した土坑の広がりを確認。遺物が多く出る。掘立柱建物が数棟あるものと考えられる。6/7 I区東側全体図の実測図を作成する。6/8 午後から空撮に向けて土糞とシートの片付けを行う。6/9 I・II区の清掃を行う。6/10 午前中、空撮に向けて清掃を行い、午後から空撮を行う。6/16・17 I区の全体図の実測を行う。6/23 II区全体図にレベル入れを行う。II区調査終了。6/24 I区のレベル入れを行う。本日で現場での作業終了。6/28 道具・ブルーシートの洗浄を行う。6/29 現場にて開発業者に引き渡しを行い調査終了。

3、調査組織

[令和3年度 調査 令和4年度 整理作業]

小郡市教育委員会 教育長 秋永 晃生

教育部長 山下 博文（令和3年度）

藤吉 宏（令和4年度）

文化財課 課長 柏原 孝俊（令和3年度）

杉本 岳史（令和4年度）

係長 杉本 岳史（令和3年度）

山崎 賴人（令和4年度）

技師 高橋 渉

柏原 孝俊（再任用 令和4年4月から）

発掘作業員

井樋博志 市瀬和子 草場誠子 陶山博 田崎正夫 田嶋道博 原田和裕 福田健一 宮原道治

村本信雄 山口玲子 山本義夫 吉田浩 （小郡市在住）

第2章 位置と環境

1、地理的環境

小郡市は福岡県の中央部に位置し、博多湾から南へ 25km程の内陸部にあたる。市域は東西 6 km、南北 12km、総面積 45.5 m²を有する南北に長い行政区をもつ。宝満山を水源とする宝満川により東西に二分され、その西岸は脊振山系から派生する丘陵部(通称、三国丘陵)を頂部として低位段丘が南へ向かって伸び、沖積地を経て筑紫平野へと連なる。大板井遺跡はこの三国丘陵から緩やかにつながる低台地上に位置している。遺跡は幅の広い舌状の台地に展開している。

2、歴史的環境

大板井遺跡は早くより知られる遺跡であり、大正 12 年(1923年)に九州帝国大学(当時)の中山平次郎博士によって『筑後國三井郡小郡村大字大板井の巨石』という論文で紹介された学術的に著名な遺跡である。昭和年間から継続的に発掘調査が行われ、今回の調査で 30 次の調査を数える。以下、周辺地域に分布する遺跡を中心に歴史的環境の概要を示す。

小郡市内における旧石器時代の遺跡は非常に少ない。三沢丘陵、夜須高原南麓、花立山周辺でナイフ形石器が確認されている。続く縄文時代においても遺跡・遺構の確認例は非常に少ない。干潟遺跡群(2)の落とし穴状遺構、大崎井牟田遺跡(3)の縄文時代早期と考えられる集積遺構などが確認されているがその数は少ない。

弥生時代前期前半には小郡市内に存在する遺跡は少ない。津古土取遺跡(4)で集落が形成され、三国の鼻遺跡(5)では土坑墓、木棺墓、甕棺墓の墓地群が確認されている。弥生時代前期後半になると遺跡が急増し、特に一ノ口遺跡(6)をはじめとする三国丘陵で遺跡の増加が著しい。弥生時代前期末になると横倉鍋倉遺跡(7)、横隈北田遺跡(8)、三国の鼻遺跡(5)などでは朝鮮系無文土器が出土する集落が存在し、大陸との強い関係が窺われる。三国丘陵を中心に展開した集落は、弥生時代中期になると大板井遺跡周辺に拠点を移す。この時期が大板井遺跡の最盛期であり、西に隣接する小郡若山遺跡(9)とともに当時の中枢的な集落を構成していたと考えられる。大板井遺跡の各所でこの時期の住居や墓域、祭祀土坑など多様な遺構と共に共存する遺物が発見されている。また、前述の巨石については現在「石崎さん」(11)という名前で呼ばれ、「穢せばたたりがある」と地元の人々の信仰の対象となっている。平成 4 年(1992年)に九州大学と小郡市教育委員会によって発掘調査が行われ、巨石の下に甕棺墓を確認している。さらに、昭和 10 年(1935年)、基山から甘木に鉄道が敷設され、軌道敷きの土取りが行われる最中に銅戈 7 本が発見された。

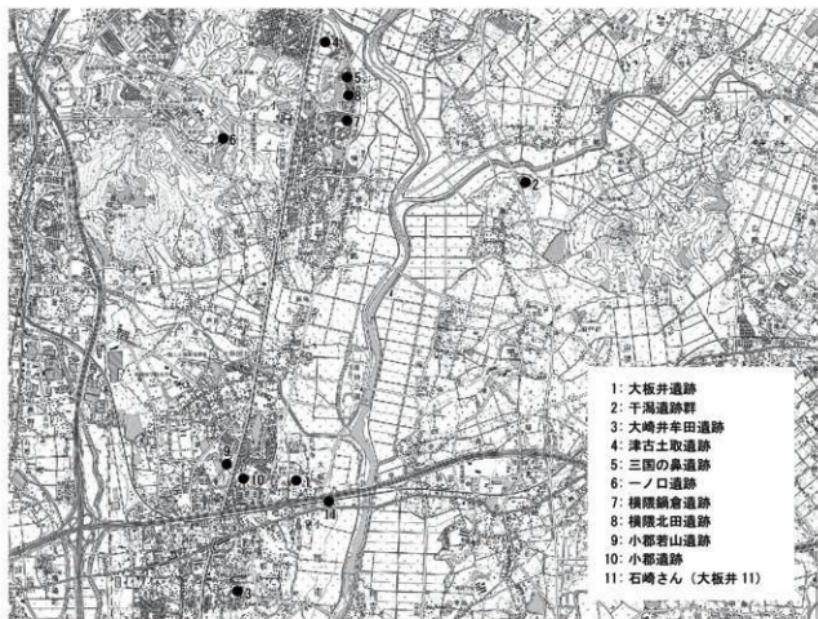


第1図 大板井遺跡 調査地位地図 (S = 1/5000)

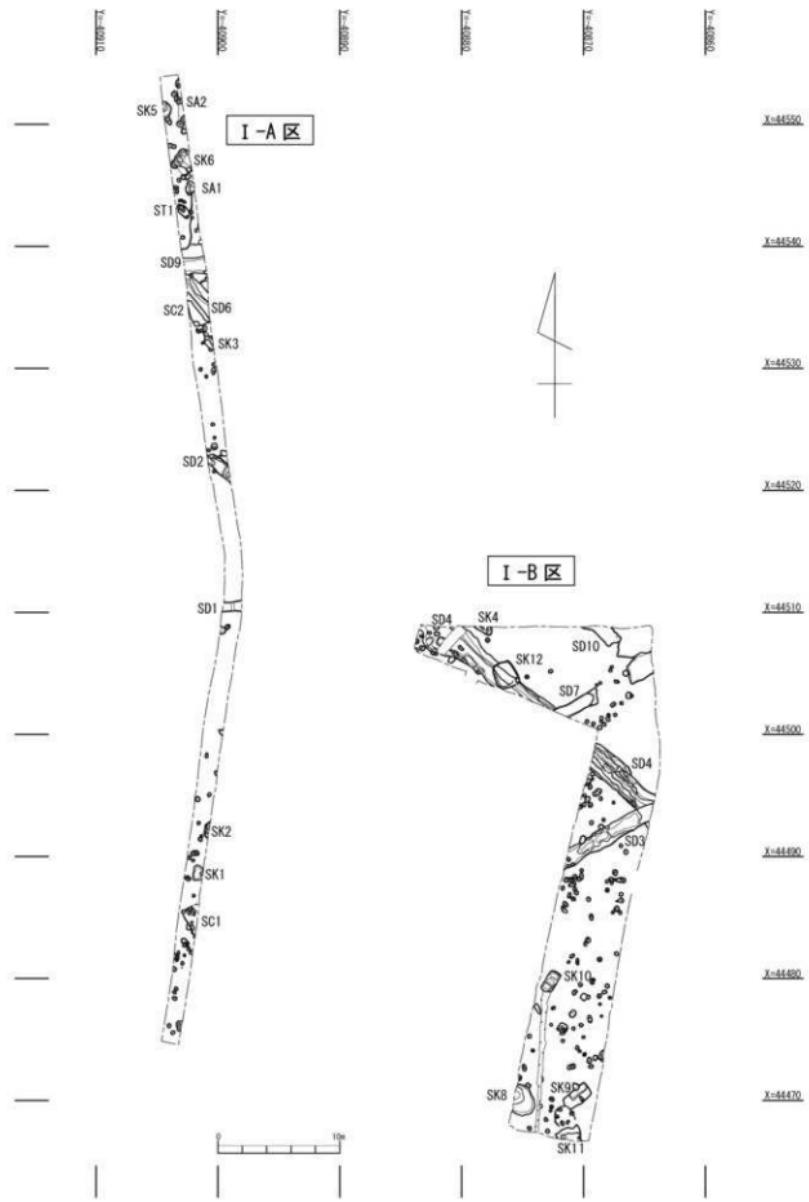
現在そのうちの2本を九州歴史資料館が、他の2本を小郡市教育委員会が保管している。そして昭和55年（1980年）に行われた大板井遺跡1次調査ではI区北側で長さ35mに及ぶV字溝が確認されている。その深さは最高で2m、幅3mを測り、北側に続く台地を切断する意味があったと考えられる。さらに隣接する小郡遺跡（10）は同時期の大型円形住居が確認された。また、小郡若山遺跡（9）では多鈕細文鏡2面を壺型土器とともに埋納したピットが見つかっており、当時のこの地域の権勢を垣間見ることができる。

古墳時代になると集落は一旦廃絶するが律令期には小郡遺跡の所在地に筑後国御原郡の郡役所に比定されている国指定史跡小郡官衙遺跡（小郡官衙遺跡群 小郡官衙遺跡 上岩田遺跡）が成立する。現在の「大板井」という地名は平安時代の書物である『和名抄』に記された御原郡4郷のうちのひとつである「板井」に由来すると推測されている。大板井遺跡10次調査では「正倉」とみられる3×4間規模の總柱建物が3棟発見され、18次調査では官衙の正倉群やその関連施設と推定される版築状盛土による造成跡などが見つかるなどこの時期に官衙隣接地として再び隆盛を迎えたと思われる。

中世以降も集落は連續と続き、現在でも多くの家が立ち並ぶ地域である。



第2図 周辺遺跡分布図 (S = 1/25000)



第3図 大板井遺跡 30 I区 遺構配置図 (S = 1/400)

第3章 大板井遺跡 30 の遺構と遺物

(1) I・II区 調査概要

調査区は、大板井遺跡の既調査区が密集する地域にあたり、弥生時代中期の集落域と思われる場所である。西に小郡遺跡（小郡官衙遺跡）を臨み、本調査区は1次調査区の東側に位置する。遺構の掘り込みは褐色ローム（基盤層）で、標高13.2m前後を測る。上部はかつて田んぼとして利用された際に削平を受けている。

調査区は便宜上、北側調査区をI区、南側調査区をII区とした。さらにI区西側調査区をI-A区、東側調査区をI-B区とし、II区北側調査区をII-A区、南側調査区をII-B区としている。I区については、竪穴住居2軒、土坑10基、溝状遺構8条、小児甕棺墓1基、土坑墓1基、柵列2条を確認した。

(2) I区の遺構と遺物

I-A区

1号住居（第4図 図版3）

I-A区南側で検出した竪穴住居であるが、削平がひどく貼床下層の一部を検出したのみである。東側は調査区外に延びる。主軸は北西-南西方向で平面は方形プランを呈する。現状で長辺3.5m、短辺2.5m、深さは3cmを測るに過ぎない。検出時には一部貼床が残存する程度で、その下層に楕円形・不整円形の掘り込みが複数認められた。住居の東側が調査区外に延びるため主柱穴については確認していない。遺物は弥生土器が出土しており、時期は弥生時代中期前葉である。

出土遺物（第9図）

少量の弥生土器が貼床下から出土している。1、2ともに弥生土器の小片である。

2号住居（第4図 図版3）

I-A区北側で検出した竪穴住居である。本来は6号溝状遺構が埋まつた後に作られたものだが検出段階で先後関係を誤り、6号溝状遺構を先に掘削してしまったため、南西隅の一部しか確認することができなかった。主軸は南西-北東方向で平面は隅丸長方形を呈する。住居の東側と北西隅は調査区外に延びている。現状で長軸2.4m、短軸0.9m、深さ24cmを測る。土層観察により本来は1.8m以上、3m前後の住居であったと考えられる。主柱穴は1穴確認している。遺物は弥生土器が出土し、時期は弥生時代中期前葉である。

出土遺物（第9・27図）

遺物は弥生土器が出土している。3、4は甕の口縁である。3は、はねあげ口縁であり古い様相を呈する。5は弥生土器の壺である。外面にヘラによるミガキ調整を行っており、橙色を呈する。6は弥生土器の蓋である。残存高5.6cmを測る。第27図3は鉄鏃である。長軸2.6cm、短軸1.8cm、厚さ0.5cm、重さ4gを測る。

1号土坑（第5図 図版3）

I-A区南側で検出した土坑で、平面は隅丸方形を呈する。土坑の東側の一部は調査区外に延びる。長軸1.2m、短軸0.8m、深さ18cmを測る。壁面は緩やかに立ち上がり、土坑の中央部にテラスを有し、一部がピット状に窪む。遺物は弥生土器が出土しているが小片のため図化していない。

2号土坑（第5図 図版3）

I-A区南側で検出した土坑で、東側半分が調査区外に延びる。平面は倒卵形を呈し、現状で長軸1.4m、短軸0.3m、深さ35cm前後を測る。複数のテラスを有し、土坑の中央部が一段低くなっている。上層は黄褐色土で土器が多く含まれており、下層は黄褐色土のブロックが混じる黒色土が堆積する。遺物は弥生土器が出土しており、時期は弥生時代中期前葉である。

出土遺物（第9図 図版9・12）

7は弥生土器の甕である。口縁は逆L字状で、残存高3.3cmを測る。

3号土坑（第5図 図版3）

I-A区北側で検出した土坑で、長軸1.2m、短軸0.7m、深さ0.4mを測る。北側にテラスを有し、南側は一段下がる。南側の平面プランは隅丸方形を呈する。上層には黒褐色土が堆積し、下層には褐色土が堆積する。遺物は出土していない。遺構の形態的特徴から、小児用の土坑墓と考えられる。

5号土坑（第5図 図版3・4）

I-A区北側で検出した土坑で、土坑の西側半分が調査区外に延びる。平面は倒卵形を呈し、現状で長軸1.35m、短軸0.65m、深さ0.7mを測る。遺構は東側に複数のテラスを持ち、そこから緩やかに床面に下る。上層は黄灰色土が堆積し、下層は褐色土ブロックを含む黄褐色土がレンズ状に堆積する。

出土遺物（第9図 図版9）

8は弥生土器の甕である。口縁は逆L字状で、時期は弥生時代中期前葉である。

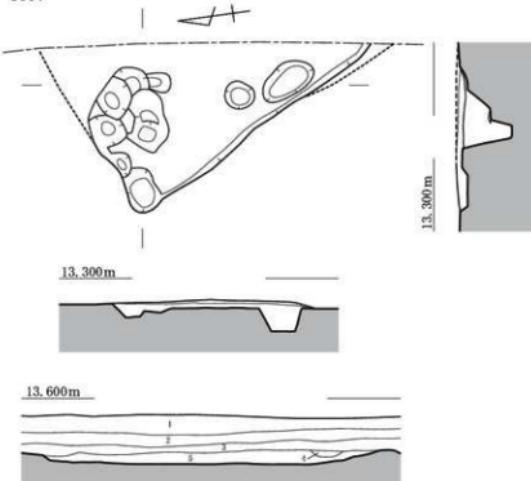
6号土坑（第6図 図版4）

I-A区北側で検出した土坑で東側が調査区外に延びる。平面は隅丸方形を呈し、南西側の一部を古代のピットにより削平されている。現状で長軸2.0m、短軸1.1m、深さ1.0mを測る。複数のテラスを有し、そこから急劇に床面に下る。上層は黒色土が堆積し、中層から下層には黄褐色土のブロックを含む暗褐色土がレンズ状に堆積する。遺物は上層から須恵器や土師器が出土し、中層から下層で弥生土器が出土している。上層の須恵器や土師器は1号攝列のもので、6号土坑の時期は弥生時代中期前葉である。貯蔵穴の可能性がある。

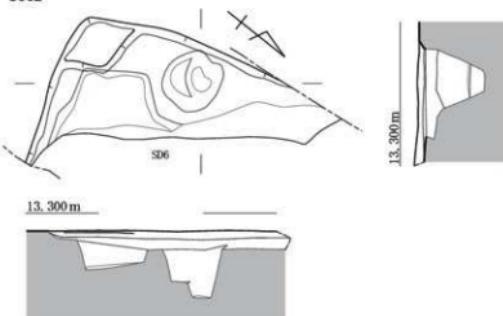
出土遺物（第9図 図版9）

9は土師器の鉢である。外面は荒いハケメ調整である。10は土師器の甕である。残存高4.5cmを測る。11は須恵器の鉢の口縁の破片である。復元口径は11.4cmを測り、体部外面の一部に自然釉が付着している。遺物の形状から提瓶の口縁部の可能性があるが、遺物が小片で断定が難しい。今回は鉢の口縁として報告する。12は土師器の高台付碗である。高台径9.5cm、残存高2.4cmを測り、回転ナデを施す。13は弥生土器の甕である。口縁は逆L字状で、口径23.2cm、残存高6.5cmの小型の甕である。外面ともにナデ調整

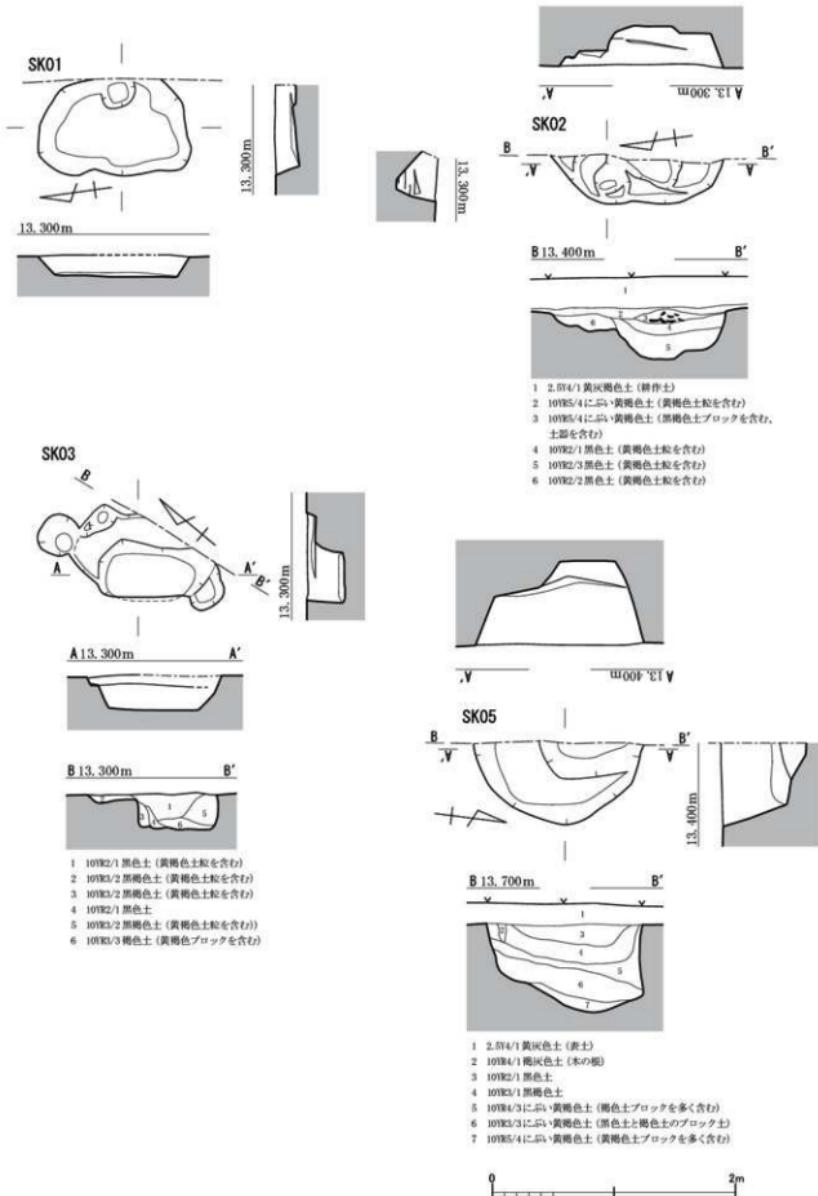
SC01



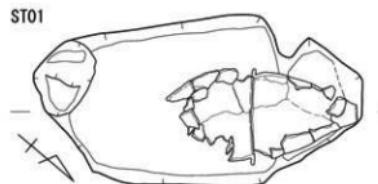
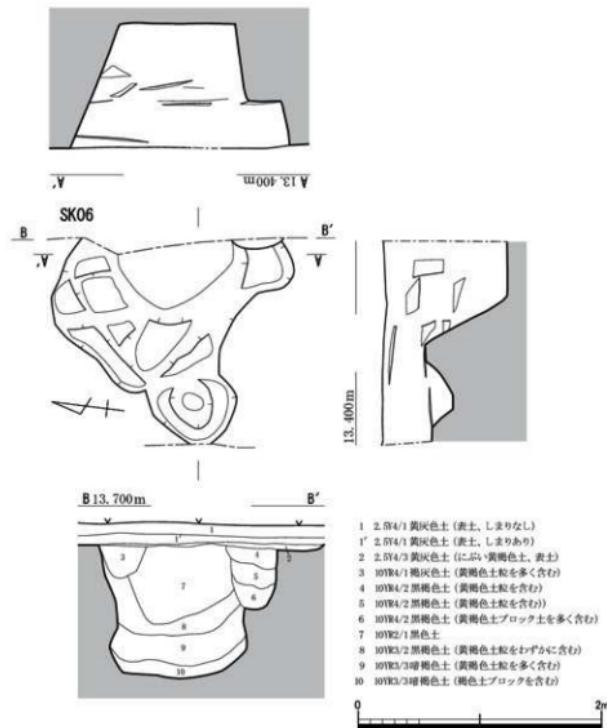
SC02



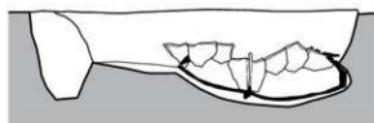
第4図 I-A区 1・2号住居跡 実測図 (S = 1/40)



第5図 I-A区 1・2・3・5号土坑 実測図 (S = 1/40)



14.000m



0 1m

第6図 I-A区 6号土坑 ($S = 1/40$)・1号甕棺墓 ($S = 1/20$) 実測図

でとても丁寧なつくりである。時期は弥生時代中期前半である。14は最下層からの出土である。弥生土器の甕の底部で底径7.4cmを測る。9から12の土師器と須恵器は上層からの出土、13・14の弥生土器は中層から下層にかけての出土である。

1号甕棺墓（第6図 図版4）

I-A区北側で検出した甕棺墓である。甕+甕の合口の小児棺である。墓坑平面は楕円形で、掘方は長軸0.85m、短軸0.65m、深さ0.25m、不整形な長方形を呈する。上面はかなり削平されており、甕棺上部及び掘り込みの一部が削平されている。甕棺墓の時期は弥生時代中期前半である。

出土遺物（第10図 図版10）

上甕は小形の甕である。口縁はやや内側に突出する逆L字口縁である。口径35.65cm、底径7.9cm、器高39.65cmを測る。内面は板状工具によるナデ調整を行い、底部付近に指オサエが見られる。外面はハケメ調整である。焼成は良好で、橙色を呈する。

下甕も小型の甕である。口縁はやや内側に突出する逆L字口縁である。口径34.95cm、底径7.6cm、器高40.8cmを測る。内面は工具状によるナデ調整を行い、底部付近は指オサエがみられる。外面はハケメ調整である。胸部中位に外側から穿孔を施している。穴の大きさは3cmほどで方形状を呈している。焼成は良好で、色調は黄橙色、外面底部付近に黒斑を有する。

1号溝状遺構

I-A区中央部分に位置し、東西に延びる溝である。検出面の標高は13.2m前後を測る。遺構検出の段階で1号溝状遺構の埋土は他の遺構とは異なり褐色を呈していた。検出面で長さは1.5mを測り、幅は0.8mを測る。床面は水平に近い。遺構の残りが悪く、深さは最大で5cmである。遺物は少量出土しているが小片のため図化していない。後世の溝であると考えられる。

2号溝状遺構（図版4）

II-A区北側に位置し、北西-南西に延びる溝である。検出面の標高は13.2m前後を測る。検出面で長さは2.3mを測り、幅は1.0m前後を測る。中央部にテラスを有し、東西が一段低くなっている。床面は水平に近く、壁面もなだらかに立ち上がる。埋土はレンズ状堆積を示す。遺物は土師器と弥生土器が出土している。

出土遺物（第9図 図版9）

15は土師器の壺である。残存高1.3cmほどで底部はヘラケズリである。ほかに埋土より黒曜石の剥片が出土している。

6号溝状遺構（第7図 図版4）

II-A区北側に位置し、北西-南東方向に延びる。北側を9号溝状遺構に、南側を2号住居により削平を受ける。標高は11.7m前後を示す。現状で長さ3.0m、幅1.6m、深さは最大で0.9mを測る。壁面は中段を有しながら急激に下る。床面は水平で、断面形はV字状を呈する。埋土は上層に黒褐色土、中層に黄褐色土、下層に黒色土が水平に堆積する。6号溝状遺構はI-B区4号溝状遺構につながるものと考えられ、6号溝状遺構と4号溝状遺構は同一の溝状遺構であると思われる。埋土中から比較的多くの弥生土器が出

土している。時期は弥生時代中期前葉である。

出土遺物（第9図）

16から19は弥生土器である。16から18は甕の口縁であり、口縁は逆L字状を呈する。16・17は外面をハケメ、18はナデを行う。19は壺の底部である。底径7.4cm、残存高4.2cmを測る。調整は外面をハケメで調整したのちナデをおこなっており、内面の底部付近には指オサエを密に施す。とても精巧なつくりである。

9号溝状遺構（第7図 図版4）

II-A区北側に位置し、東西方向に延びる。標高13.0m前後を測る。6号溝状遺構が埋没した後に9号溝状遺構を掘削している。II-B区では9号溝状遺構の続きを検出していない。検出面で長さ1.8m、幅1.3m、深さ25cmを測る。北側に一段テラスを有する。溝の断面形は円形に近く、壁面もなだらかに立ち上がる。埋土はレンズ状の自然堆積と考えられる。遺物は弥生土器が出土し、時期は弥生時代中期前葉の時期である。

出土遺物（第9図）

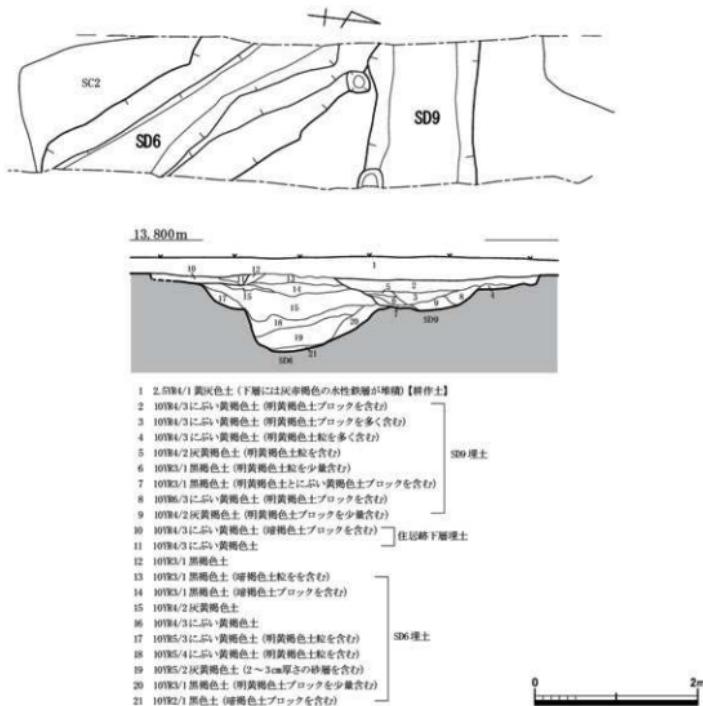
20は弥生土器の甕である。口縁はやや内側に突出する逆L字口縁である。残存高3.4cmを測り色調は黄橙色を呈する。口縁端部に刻み目、胸部には暗文を施している。

1号柵列（第8図）

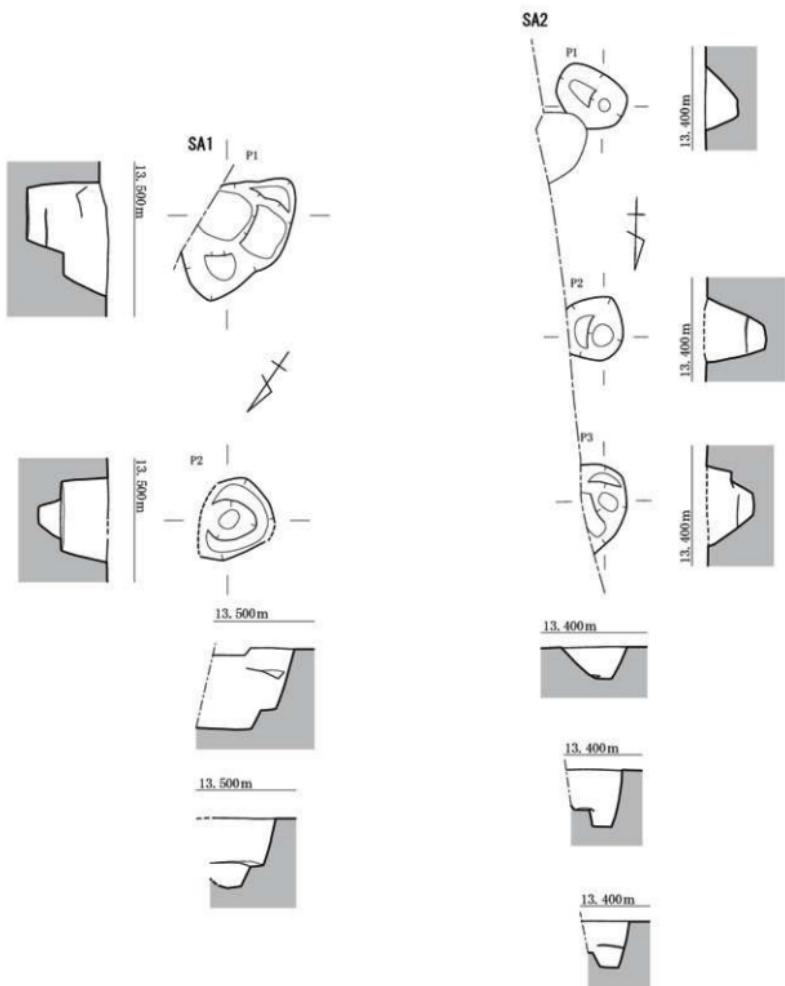
I-A区北側、標高13.2mで検出した。6号土坑より後出する。調査区内では2本の柱穴のみの確認である。柱間は2.5mである。P1は長軸0.9m、短軸0.8m以上、深さ0.65m程度である。P2は長軸0.7m、短軸0.6m、深さ0.55mを測る。調査区内が矮小で建物を復元するには至らなかつたため、柵列（柱列）として報告する。柱穴の中からは、土師器と須恵器の破片が出土しており、6号土坑の土師器と須恵器である。時期は7世紀後半から8世紀前葉である。

2号柵列（第8図）

I-A区北側、標高13.3mで検出した。柵列の東側は調査区外に延びる。調査区内では3本の柱穴を確認した。柱間は1.5～1.8mである。P1は現状で長軸0.6m、短軸0.5m、深さ0.25m、P2は現状で長軸0.5m、短軸0.4m+α、深さ0.5m、P3は現状で長軸0.7m、短軸0.4m+α、深さ0.4mを測る。調査区が矮小で建物を復元するに至らなかつたため、今回は柵列（柱列）として報告する。遺物は土師器と須恵器の破片が出土しているが小片のため図示していないが、時期は8世紀前葉である。

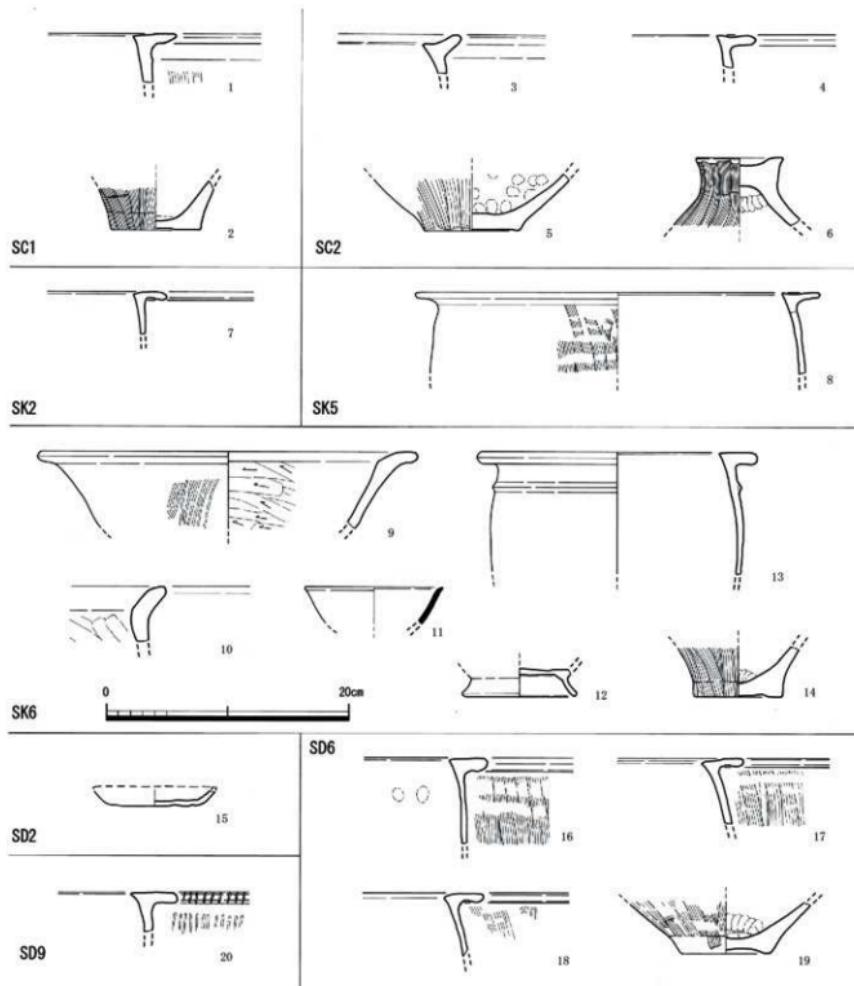


第7図 I-A区 6・9号溝状遺構 実測図 (S = 1/60)

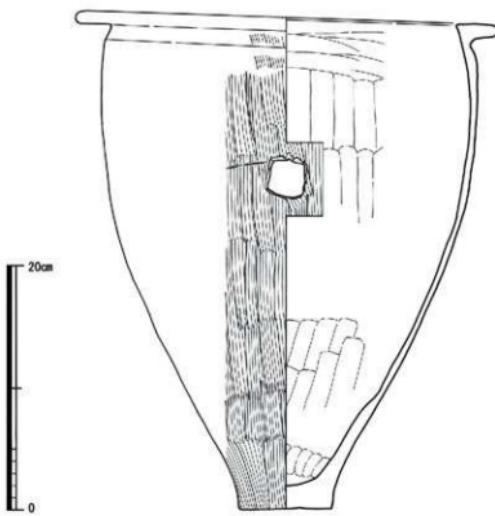
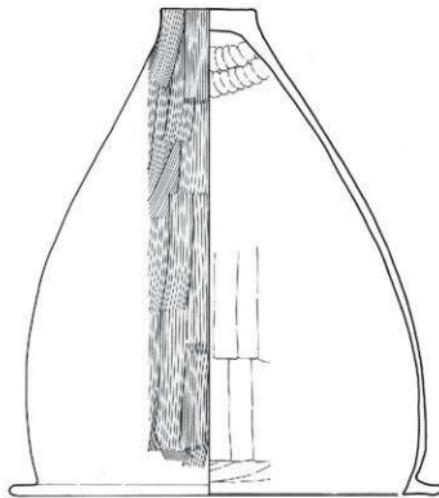


0 2m

第8図 I-A区 1・2号槽列 実測図 ($S = 1/40$)



第9図 I-A区 出土土器 実測図 ($S = 1/4$)



第10図 I-A区 1号葬棺 実測図 ($S = 1/4$)

【II-B 区】

4号土坑（第11図 図版5）

II-B 区北西側で検出した土坑で、土坑の北半分が調査区外に延びる。平面は楕円形を呈し現状で長軸1.5m、短軸0.7m、深さ30cmを測る。中央部にテラスを有し、東西方向に向かって緩やかに下っていく。遺物は須恵器と土師器が出土している。

出土遺物（第14図 図版9）

1は須恵器の壺蓋である。口径12.1cmを測る。2は土師器の甕もしくは瓶の口縁である。外面調整は荒いハケメである。時期は7世紀後半である。

8号土坑（第11図 図版5）

II-B 区北西側で検出した土坑で、東側が調査区外に延びる。現状で長軸2.6m、短軸1.8m、深さ0.75mを測る大形の土坑である。平面は不定形な円形を呈し、壁面は緩やかに立ち上がる。土坑は中段にテラスを有し、中央部分が一段下がる構造である。土層は上層に黒褐色土が堆積し、最下層に黄褐色砂質土が、平行に堆積する。土坑からは多くの須恵器や土師器の破片が出土しており、廃棄土坑であると考えられる。

出土遺物（第14図 図版9）

3・4・5は須恵器の壺蓋である。5は口径12.2cmを測り高台がつく。6・7は土師器の壺である。6は立ち上がりが小さく、7は立ち上がりが大きい。8・9は土師器の甕である。内面はナデ、外面はヘラケズリを行っている。時期は8世紀前半である。

9号土坑（第12図 図版5）

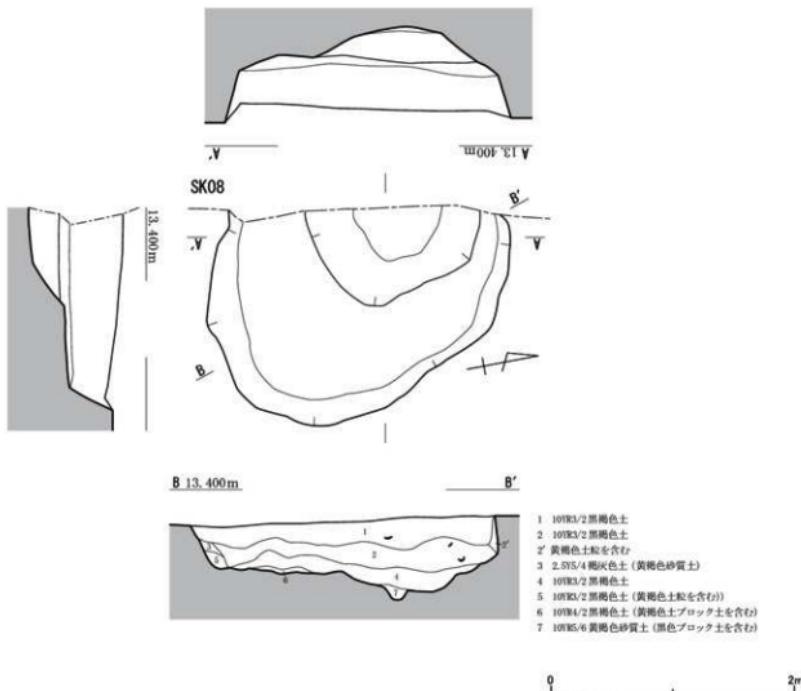
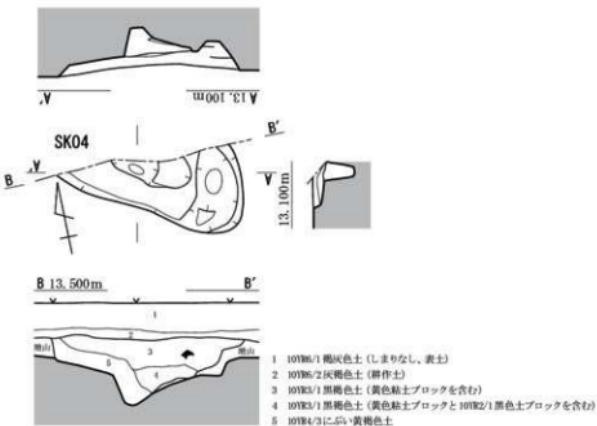
II-B 区北側で検出した土坑で南側の一部に削平を受ける。平面は方形を呈しており、東側にテラスを有する。西側は隅丸方形状に窪む。現状で長軸2.4m、短軸1.3m、深さ最大20cmをはかるが、調査区北側は全体的に削平を受けていたため本来はもう少し深かったものと考えられる。形態的特徴から土壤墓の可能性がある。

出土遺物（第14図 図版9）

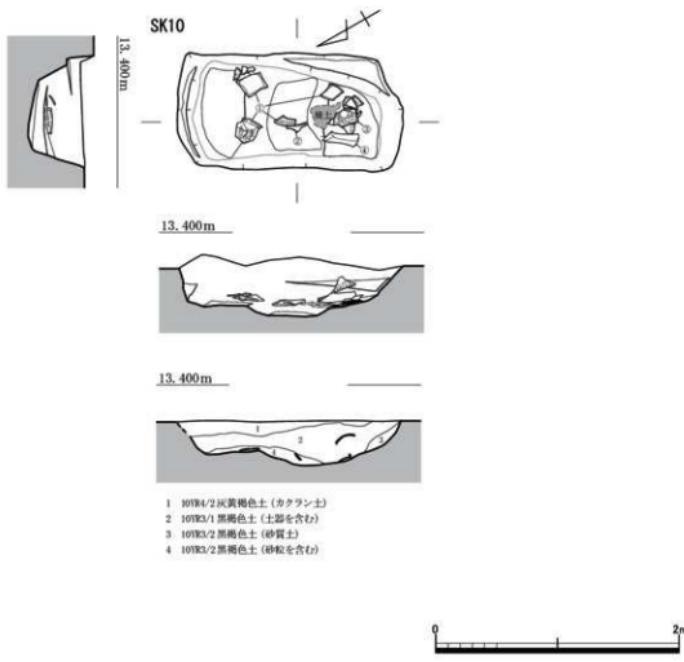
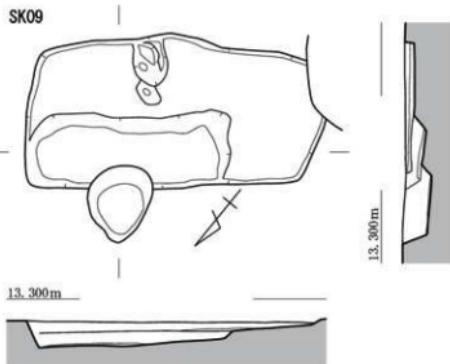
10・11は須恵器の壺である。10は口径16.8cmを測り外面底部は回転ヘラ切りである。11は口径19cmで、回転ナデを施す。12は土師器の甕である。口径16.2cmを測る小形の甕である。外面は荒いハケメ、内面はケズリを施す。外面胴部下半に煤が付着している。時期は8世紀前半である。

10号土坑（第12図 図版5）

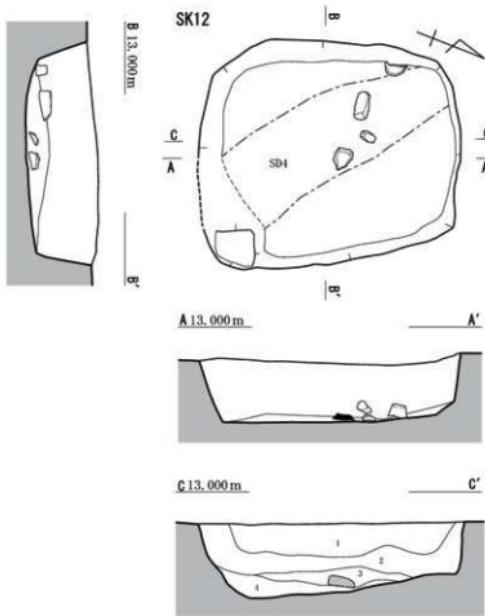
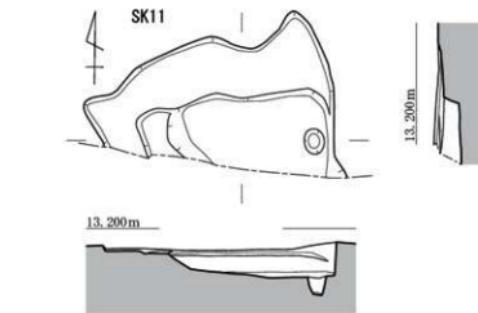
II-B 区北側で検出した土坑で平面は長方形を呈する。規模は長軸1.9m、短軸0.9m、深さ0.5mを測る。土坑の南側の一部と上層は削平を受ける。土坑の両端にテラスを有し、中央が一段低くなる構造である。壁面は緩やかに立ち上がり、床面は砂層である。土坑からは中層から下層にかけて弥生土器の甕や蓋、大型の砥石などが出土し、最下層からは弥生土器とともに焼土が出土している。土層は黒褐色土が平行に堆積している。時期は弥生時代中期前半である。



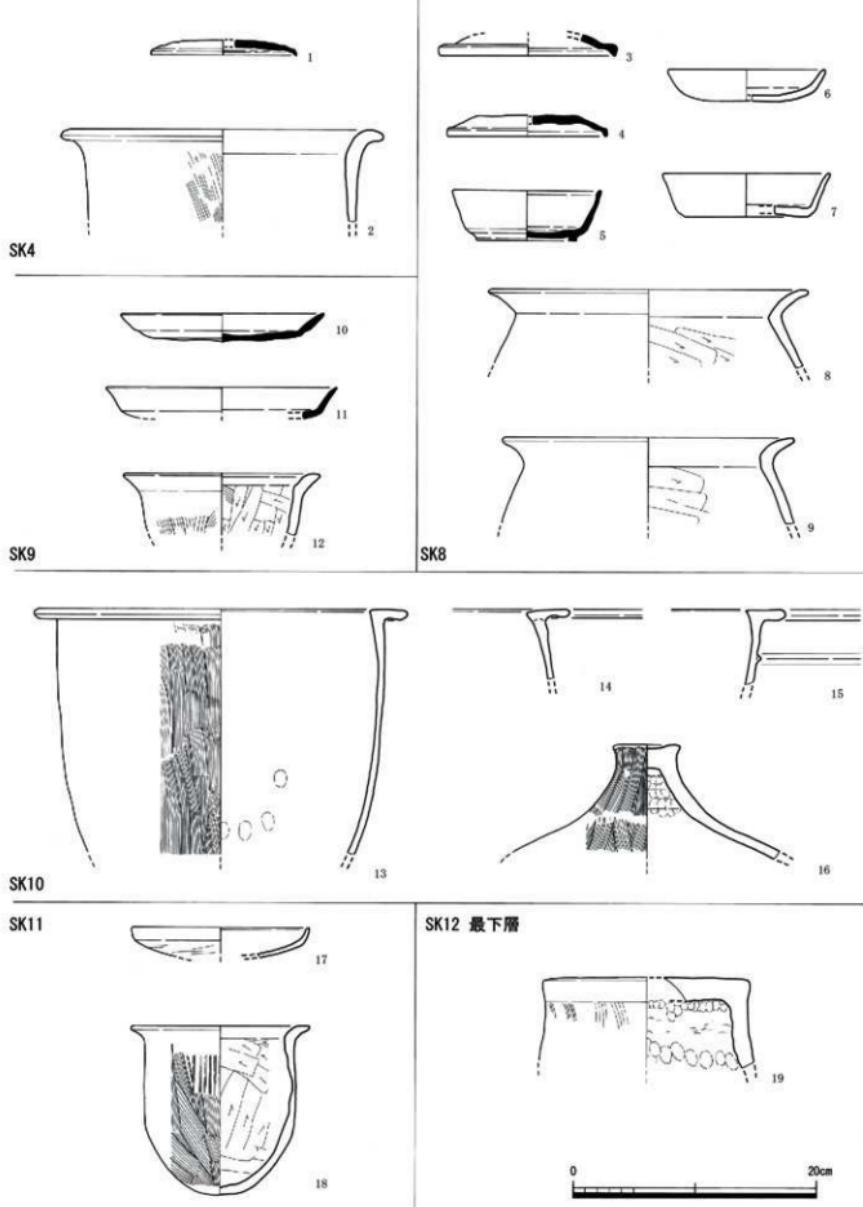
第11図 I-B区 4・8号土坑 実測図 (S = 1/40)



第12図 I-B区 9・10号土坑 実測図 (S = 1/40)



第13図 I-B区 11・12号土坑 実測図 (S = 1/40)



第14図 I-B区 4・8~12号土坑出土土器 実測図 (S = 1/4)

出土遺物（第14・27図 図版9・12）

13は弥生土器の甕で下層より出土した（第12図①）。胴部上半のみ残存する。口径30.7cm、残存高20cmを測り、口縁はやや内側に突出する逆L字口縁である。外面をハケメ、内面をナデで調整する。14は弥生土器の甕である。やや内側に突出する逆L字口縁である。15は弥生土器の甕で、下層より出土した（第12図②）。口縁はやや内側に突出する逆L字口縁で、内外面ともにナデ調整を行っている。とても丁寧なつくりである。16は弥生土器の蓋で中層より出土した（第12図③）。天井部径5.6cm、残存高8.7cmを測り、外面はハケメ、内面はナデにより調整を行う。また内面の底部付近には指オサエを密に行っている。天井部外面に種子の圧痕が残り、黒斑を有する。第27図5は砥石である。下層からの出土である（第12図④）。最大長24.3cm、最大幅6.6cm、最大厚4.7cm、重さ1.22kgを測る大形の砥石である。5面を砥石面として使用している。石材は石英長石斑岩である。

11号土坑（第13図 図版5）

I-B区南側で検出した土坑で南側の約半分が調査区外に延びる。平面は方形を呈し、現状で長軸2.0m、短軸1.1m、深さ20cmを測る。平面は方形を呈し、北側にテラスを有する。さらに北側はテラスより一段低くなっている、不定形の方形を呈している。遺物は埋土から土師器の坏や完形にちかい甕が出土している。この構造は9号土坑とも類似しており、土塙墓の可能性がある。

出土遺物（第14図 図版9）

17は土師器の坏である。口径14.7cmで手持ちヘラケズリを施す。18は土師器の甕である。口径14.7cm、器高13.9cmを測る小形の丸底の甕である。ほぼ完形である。外面は荒いハケメ、内面は強いケズリを施す。外面に煤が付着する。

12号土坑（第13図 図版5）

I-B区北西側で検出した土坑で、4号溝状遺構を切る。平面は隅丸方形を呈し、現状で長軸2.3m、短軸1.8m、深さ0.6mを測る。4号溝状遺構の埋没後に掘削されている。壁面は急激に下り、床面は溝状に窪むがこれは4号溝状遺構に伴うものであり、本来の床面は水平である。上層は黒褐色土が堆積し、下層になるにつれ黒褐色土に褐色土のブロックが混じる。また床面直上から弥生土器とともに石が出土している。

出土遺物（第14図 図版9）

19は弥生土器の器台である。最下層からの出土である。天井部径17.1cm、残存高13.9cmを測る。外面はハケメのちナデで調整を行い、内面はナデにより調整を行う。内面には指オサエを密に行い、指頭痕が多く残る。また内面中位には爪形が多く残る。

3号溝状遺構（第15図 図版6）

I-B区南東に位置し、南西から北西に延びる。標高13.1～12.8m前後を測る。4号溝状遺構を切る。現状で長さ8.0m、幅1.5m、深さ最大0.6mを測る大形の溝状遺構である。床面は凹凸が激しい。壁面は緩やかに立ち上がる。埋土については、上層はマーブル状に堆積しており、流れが相当早かつたことを物語る。溝状遺構を掘削後、地山由來の黄褐色粘質土をもじいて凹凸を平坦にし、溝状遺構の底を整地している。埋土からは弥生土器の小片が多く出土している。

4号溝状遺構（第15・16・17図 図版6・7）

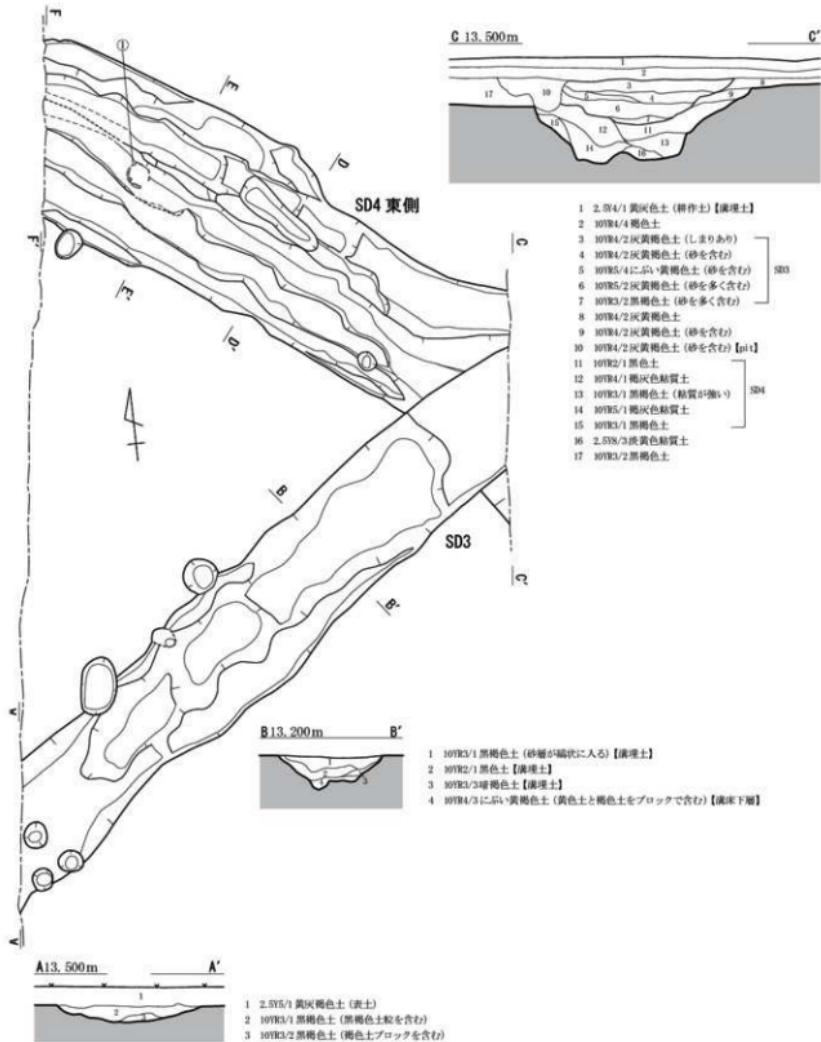
I-B区北西から南東にかけて検出した溝状遺構で、北西から南西に延びる。I-A区で検出した6号溝状遺構に続く溝状遺構であると思われる。4号溝状遺構の南側は3号溝状遺構に削平される。I-B区で検出した4号溝状遺構は現状で17.7m、幅は最大2.9m、最小で2.0mを測る。深さは最大で1.0mで深い部分においても0.8mほどである。4号溝状遺構の北側では南側にテラスを有し北側が一段下がる構造をしている。埋土を観察すると溝状遺構の西側では、掘削後灰黄褐色土の砂質土と粘質土で交互に埋め立てたのち、再度北側を掘削している。一方4号溝状遺構の東側では最初に溝状遺構を掘削後、南側部分について掘り直しを行っている。4号溝状遺構東側の西壁土層（F-F'）では4号溝状遺構が埋没する途中で再掘削しており、4号溝状遺構東側では少なくとも3回にわたって掘り直しが行われている。4号溝状遺構の東側では床面を複数確認している。また東側では底に口縁から頸部を故意に打ち欠いた壺が据えられた状態で出土している。時期は弥生時代中期後半であり、この時期に再度掘削している。4号溝状遺構の西側は壁面が急激に下るのに対し、東側は段上に下っていく。埋土は水平堆積であり人為的に埋め立てられている。埋土から多くの弥生土器片が出土し、甕棺の口縁部や胴部片などの大型の遺物も含まれている。時期は弥生時代中期前葉～中期後半の時期であり、その中には弥生時代前期後半の土器や弥生時代中期末の土器も含む。また数は多くはないが丹塗り土器や祭祀土器も含まれる。また上層からは須恵器や製塙土器と思われる表面にタタキを施す土師器も出土している。

出土遺物（第18・27図 図版9・10・12）

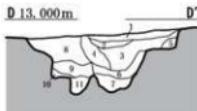
1～4は弥生土器の甕である。1は内側に突出する逆L字口縁で、口径38.2cm、残存高11.1cmを測る。外面には二次焼成にともなう赤変、器表摩耗がみられる。5は如意型の甕の口縁である。口縁下に三角突帯がつく。残存高6.4cmを測り外面をハケメのちナデで調整している。色調は灰白色を呈する。時期は弥生時代前期初頭であるが混ざり込みと思われる。6は弥生土器の高杯の脚部である。底径19.7cmを測り外面はミガキを施し、橙色を呈する。7は弥生土器の壺である。掘り直しをおこなった溝の底に据え置かれたような状態で出土した。頸部から口縁は打ち欠きを行う。底径7.2cm、器高23.6cmを測る。外面はミガキを行い、底部付近は板状工具を用いて幅の広いミガキを行っている。内面はナデ調整で底部付近は指オサエを施す。外面下半から底部にかけて一部黒変している。8は瓢型土器である。残存高5.6cmを測る。2条の突帯を有し突帯下には暗文を施す。内面は工具ナデである。接合はできないが同一個体と思われる破片が1点出土している。9は高杯のミニチュア土器である。口径7.0cm、器高5.1cm、底径3.5cmを測りほぼ完形である。内外面ともにナデを行い、非常に丁寧なつくりである。内面に黒斑を有する。10は須恵器の壺身で、上層からの出土である。口径13cm、器高3.6cmを測る。外面は回転ヘラケズリ、内面は回転ナデである。時期は7世紀前半である。第27図1は外面にタタキを施す土器の破片で、上層からの出土である。残存高4.5cmを測り褐色を呈する。外面はタタキ、内面は布目痕がみられ、器壁が厚い。小片のため断言するのは難しいが製塙土器の可能性がある。2は土製の投弾である。重さ16.2gを測る。

7号溝状遺構

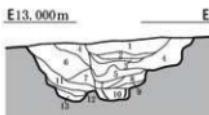
I-B区北西隅で検出した溝状遺構で、南東から北西方向に延びる。標高は12.8m前後を測り、4号溝状遺構を切る。現状で2.3m、幅1.2m、深さ20cmほどである。壁面は緩やかに立ち上がり、床面は比較的水平である。埋土から土師器の小片が少量出土している。



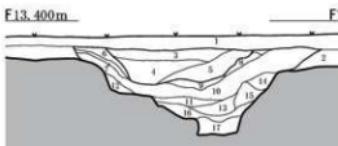
第15図 I-B区 3・4号溝状遺構 実測図 (S = 1/60)



- 1 10YR3/3暗褐色土 (SD4①)の第2層と同じ)
- 2 10YR3/3暗褐色土 (砂粒が砾中に入り) (SD4①)の第2層と同じ)
- 3 10YR6/1褐色灰土 (砂粒を多く含む) (SD4①)の第5層と同じ)
- 4 10YR1/1黒褐色土 (SD4①)の第4層と同じ)
- 5 10YR4/2灰黃褐色土
- 6 10YR6/2灰黃褐色土 (SD4①)の第4層と同じ)
- 7 10YR6/3浅黃褐色土 (粘性が強め)
- 8 10YR6/1褐色灰土 (第6層と同じ)
- 9 10YR6/1褐色土 (砂を含む) (SD4①)の第10層と同じ)
- 10 10YR5/1褐色灰土 (砂を多く含む) (SD4①)の第12層と同じ)
- 11 10YR6/2灰白色土 (粘性が強め)



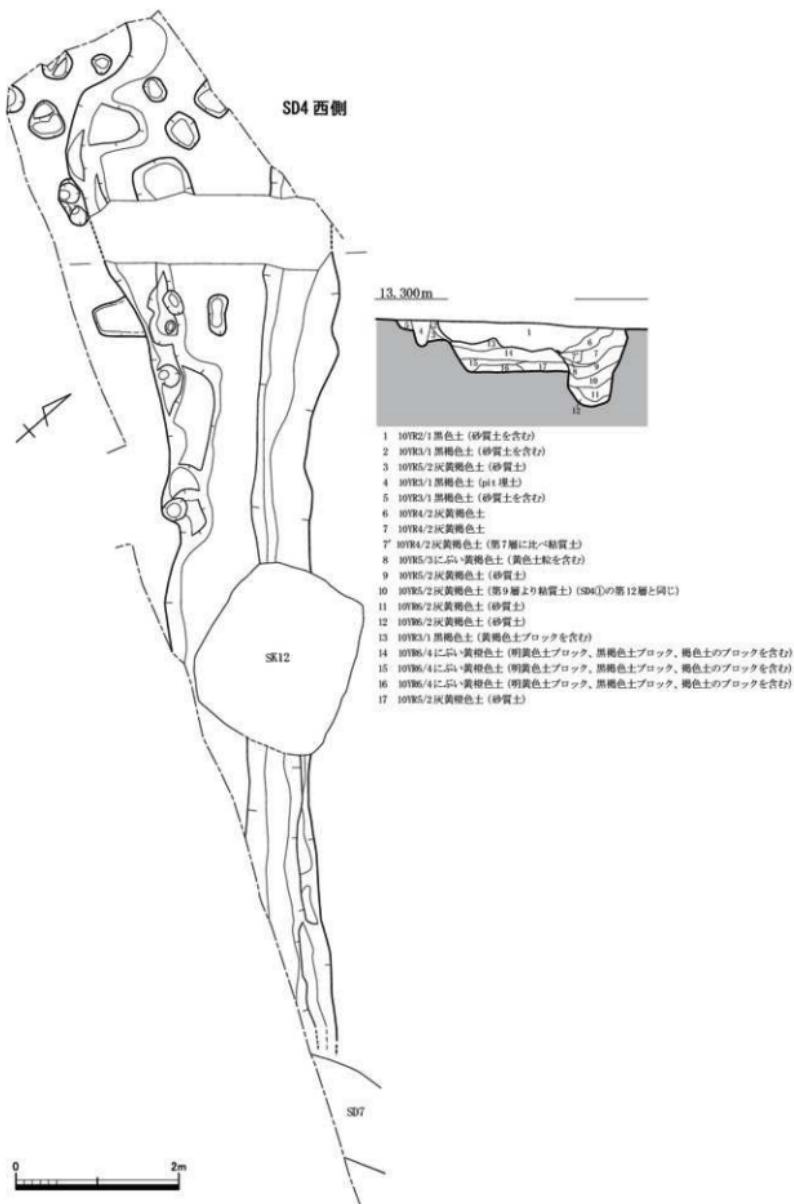
- 1 10YR3/3暗褐色土 (黄色粘土ブロックを含む) (第4層と同じ)
- 2 10YR3/3暗褐色土 (黄色粘土ブロックを含む) (第5層と同じ)
- 3 10YR4/1褐色灰土 (水性鉄を含む) (第9層と同じ)
- 4 10YR1/1黒褐色土
- 5 10YR6/2灰褐色土 (砂を多く含む) (第11層と同じ)
- 6 10YR5/1褐色土
- 7 10YR4/1褐色灰土 (砂を多く含む) (第13層と同じ)
- 8 10YR5/2灰黃褐色土 (第16層と同じ)
- 9 10YR3/3暗褐色土 (粘性が強い)
- 10 10YR6/1褐色土 (砂を多く含む) (第17層と同じ)
- 11 10YR5/1褐色土 (黄色土粒を含む)



- 1 7. 10Y6/1黒灰色土 (砂層が混じる、表土【表土】)
- 2 10Y4/2灰黃褐色土【準礫土】
- 3 10Y5/2灰黃褐色土 (黄色粘土ブロックが混じる)
(盛り土おいた土、2回目)
- 4 10Y3/3暗褐色土 (黄色粘土ブロックが多量に混じる)
(盛り土おいた土、2回目)
- 5 10Y3/3暗褐色土 (黄色粘土ブロックと黒褐色ブロック土
が混じる) (盛り土おいた土、2回目)
- 6 10Y8/2灰白色土 (黄色粘土ブロックと黒褐色ブロック土
が混じる)
- 7 10Y2/1黑色土
- 8 10Y8/8 黄褐色粘土 (砂粒を含む)
- 9 10Y4/1褐色灰土 (砂分を含む)
- 10 10Y3/1黒褐色土
- 11 10Y6/1褐色灰土 (砂を多く含む)
- 12 10Y5/2灰黃褐色土 (砂+鉄分を含む)
- 13 10Y4/1褐色灰土
- 14 10Y5/2灰黃褐色土 (砂+鉄分を含む、しまりが弱い)
- 15 10Y5/1褐色灰土
- 16 10Y5/2灰黃褐色土
- 17 10Y6/1褐色灰土



第16図 I-B区 4号溝状造構 土層図 (S = 1/60)



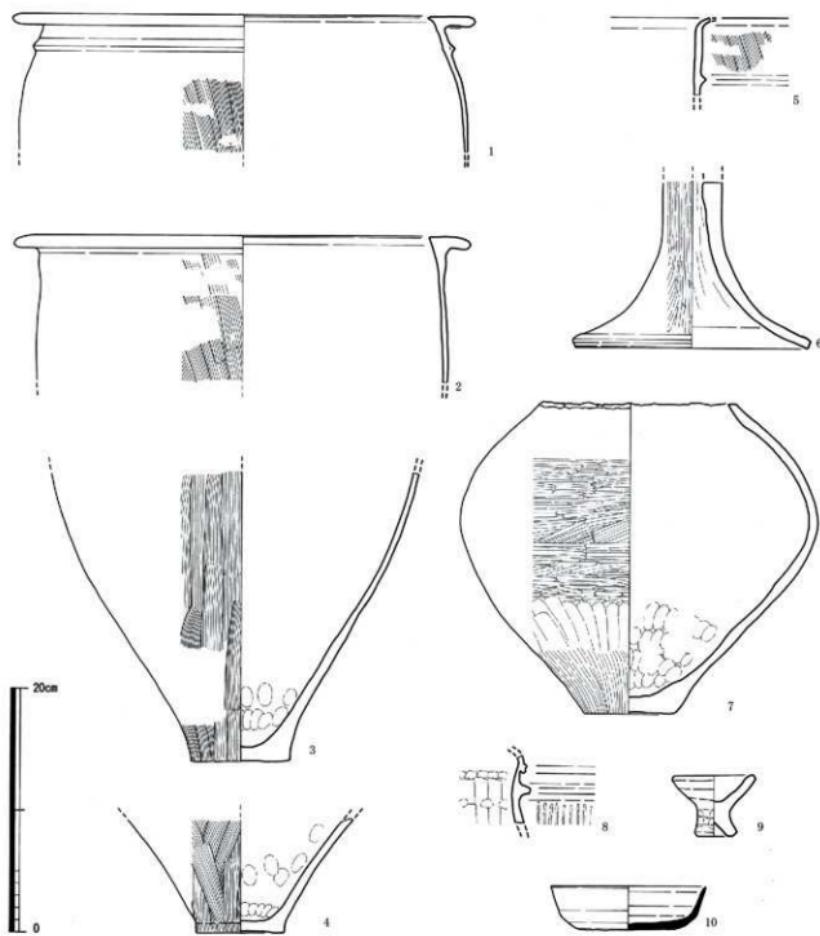
第17図 I-B区 4号溝状遺構西側 実測図 (S = 1/60)

10号溝状遺構

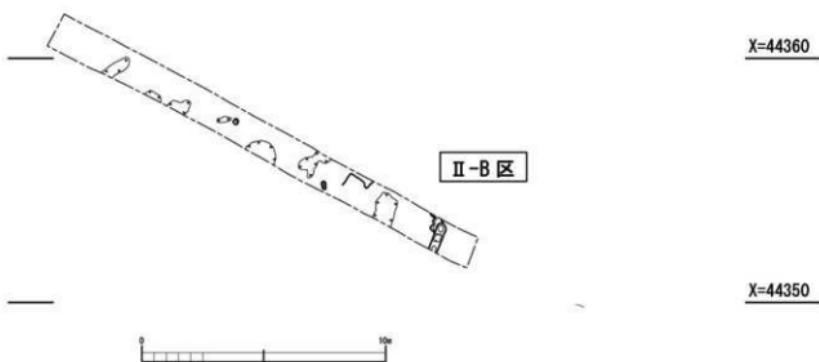
I-B区北東隅で検出した溝状遺構で、南から北にかけて延びる。標高は12.6m前後を測る。現状で長さ1.6m、幅1.3m、深さ10cmほどである。壁面は緩やかに立ち上がり、床面は水平である。埋土からは弥生土器の小片が少量出土している。

その他の遺物（第27図 図版12）

第27図4はサヌカイトのスクレイパーである。表土からの出土である。長軸6.5cm、最大幅3.3cm、最大厚1.5cm、重さ27gを測る。ほかにもサヌカイトの石核が表土より出土している。



第18図 I-B区 4号溝状遺構出土土器 実測図 ($S = 1/4$)



第19図 大板井遺跡30 II区 遺構配置図 (S = 1/200)

(3) II区 調査概要

II区については北側の調査区をII-A区、南側の調査区をII-B区としている。II-A区の東側は住宅と面しており、住宅建設の際に持ち込まれたと思われる砂が厚く堆積し、その下より遺構を確認した。一方、西側は畑に利用されており東側に比べ40cmほど低くなってしまっており耕作土の下より遺構を確認した。遺構を検出した標高は11.6mを測り、土坑3基（うち2基は祭祀土坑）、廂付掘立柱建物2棟を確認した。

II-B区は重機による表土掘削を行ったが攪乱がひどく、遺構は確認できなかった。

【II-A区】

1号掘立柱建物（第25図 図版7）

II-A区東側中央に位置し、検出面の標高は11.7m前後を測る。3間×2間の掘立柱建物で、東側に一面廂が付く三間一面の掘立柱建物である。P4、P5については2号土坑、3号土坑により確認できなかつたため、総柱の掘立柱建物であるかどうか不明である。規模は桁行間1.6m～1.8m、梁行間1.0m～1.3mである。柱穴の深さは身舎部0.2～0.3m前後、廂部分については0.1m程度で最大0.5mほどである。P2以外の柱穴では柱痕を確認している。またP5、P6以外の柱穴では底部中央付近に皿状の窪みがあり、ここに柱がたっていた可能性がある。柱痕が確認された柱穴では土坑に直接柱を据え、その後黒色土から黒褐色土の土と褐色土を互層状に埋めている。

2号掘立柱建物（第26図）

II-A区北西に位置し、検出面の標高は11.5m前後を測る。現状で3間×1間分確認しており西側に延びると考えられる。規模は、桁行間1.5～1.7m、梁行間0.7～1.0mである。深さは0.35m前後である。東側に廂が付く廂付きの掘立柱建物であると思われる。時期は不明であるが、柱穴の埋土から弥生土器の小片が出土している。

1号土坑（第20図 図版7）

II-A区北側で検出した土坑で、土坑の中央部をブロック塀により削平を受けている。現状で、長軸1.8m、短軸0.9m、深さ25cmを測る。中央にテラスを有し、東西に向かって緩やかに下っていく。遺物は弥生土器が出土しているが小片のため図示していない。

2号土坑（第20図 図版7）

II-A区東側で検出した土坑で、南側を3号土坑により削平をうける。土坑の東半分は調査区外に延びる。現状で長軸2.0m前後、短軸1.8m前後、深さ0.7mを測る。階段状のテラスを有しており、壁面は緩やかに東側に向かって下していく。上層は黒褐色土が堆積し、下層は黄褐色粘土ブロックが混じり、水平に堆積する。標高は11.6m前後を測り、その直下で多量の土器が出土している。器種は弥生時代中期の甕や丹塗りの高杯など様々であり、遺物または遺構の形態的特徴から祭祀土坑だと考えられる。

出土遺物（第21・22・27図 図版10・11・12）

第21図1から5は口縁が内側に向する逆L字形の甕である。1・2の外面には煤が付着している。また3の内面の一部が黒変している。5は口縁部から胴部外面にかけて一部が黒変しており、胴部中央付

近に内欠きを多数行っている。6は底径7.75cm、残存高15.9cmを測り、胴部中位で内欠きを行っている。さらに胴部外面には煤が付着し、胴部から底部にかけては二次焼成のため赤変している。7は樽形の甕である。内面は荒いハケを施したのち板状工具でナデを行っている。底部外面には黒斑を有する。また胴部外面には煤が付着している。8も樽形の甕で、黒色の磨研土器である。底径15.1cmを測る。外面はヘラミガキを施している。外面には黒斑を有する。9は無頸壺である。口径10cm、底径6.5cm、器高14.5cmを測り、ほぼ完形の丹塗磨研土器である。第22図1は広口壺で、頸部付近で内欠きをおこなっている。調整は板状工具によりナデをおこなっており、とても丁寧なつくりである。胴部には2条のM字状突帯を有する。外面には黒色顔料を塗布している。2は鉢で口径37.85cmを測る。口縁はL字型で、口縁部下に三角突帯を有する。3・4は丹塗磨研の高坏脚部である。5から7は器台である。外面をハケメ、内面を工具ナデにより調整している。8・9は無頸壺の蓋である。10は丹塗磨研の筒形器台である。残存高13.6cmを測る。脚端部には未発達な鋤先口縁状のものが貼り付いている。第27図6は石斧である。最大長5.7cm、最大幅5.7cm、厚さ3.2cmを測り、石材は安山岩である。側面には叩打痕がみられ、石斧が折れた後に側面をたたき石として再利用したと思われる。

3号土坑（第20図 図版7）

II-A区東側で検出した土坑で、2号土坑を切る。2号土坑と同様に土坑の東半分は調査区外に延びる。現状で長軸2.2m前後、短軸1.3m前後、深さ0.8mを測る。南側には階段状のテラスを有する。壁面は緩やかに下っており、中央が一番低くなるすり鉢状の土坑であると考えられる。上層は黒褐色土が堆積し、土器が多く含まれる。中層は明黄褐色土であり、下層は土器を含む黒色土が水平に堆積している。土層の堆積状況から土坑は自然に堆積していったのではなく人為的に埋め戻されたと考えられる。3号土坑も2号土坑同様高11.6m前後を測り、その直下で土器が大量に出土している。器種は弥生時代中期の甕や丹塗りの高坏などがみられ、遺構の形態や土器の出土状況から2号土坑同様、祭祀土坑であると思われる。

出土遺物（第23・24図 図版11・12）

第23図7から11は甕である。7・8・10は内側に内向する逆L字型口縁で、9は鋤先状口縁である。9はほかの土器に比べ新しい様相を呈する。さらに9・11は口縁下に三角突帯を有する。12は広口壺で、口径28.5cmを測る。口縁から頸部の外面に暗文を施す。第24図1は広口壺で、口径28.5cm、器高11.6cmを測る。外面はハケメを施したのち丁寧にナデ消している。内面もナデにより調整を行っている。また外面中位に三角突帯が付く。2は壺である。外面はヘラミガキを行い、外面には黒斑を有する。3は残存高7.0cmを測る小形の高坏である。外面はミガキを行っている。二次焼成により赤変している。4・5は丹塗磨研の高坏である。脚部と受部内面にミガキを行う。6・7は器台の完形である。外面はハケメで内面には工具ナデを行う。8・9は支脚である。内外面ともにナデにより調整を行っている。10は筒形器台の鰐部である。残存高4.5cmを測る。口縁部外面から鰐部上面に暗文を施す。橙色を呈している。

3号土坑下層 出土遺物（第24図 図版12）

第24図11は弥生土器の甕である。口径29cm、器高34.1cm、底径6.8cmを測りほぼ完形である。口縁はやや内側に突出する逆L状口縁である。内面胴部下半から底部にかけてコゲが付着している。また、外面中位には焼成時の破裂痕がみられる。12は甕である。口径31.8cm、器高19.85cmを測る。口縁はやや内側に突出する逆L字状口縁である。胴部中位で内欠きを行っている。口縁部から胴部にかけて煤が付着し、

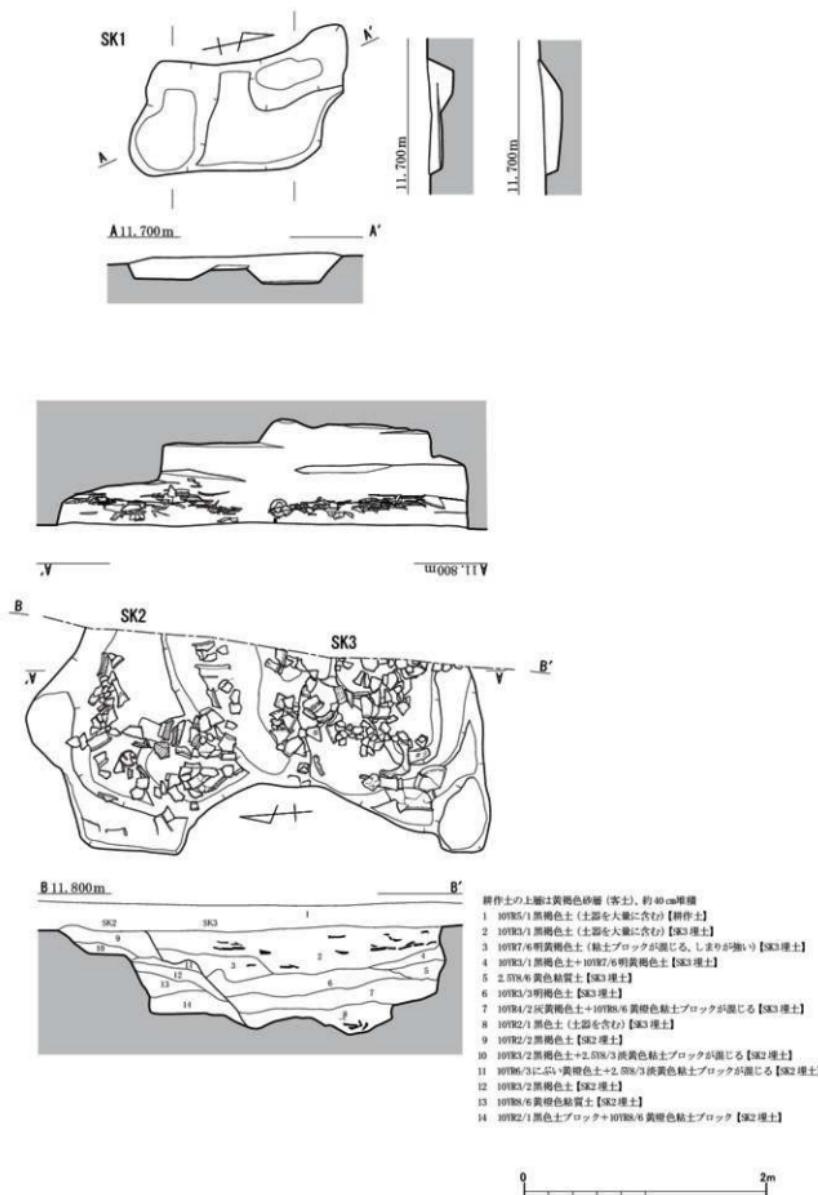
内面中位にはコゲが付着する。13は弥生土器の甕である。外側へ大きく直線的に開く器形をなし、口縁部下に一条の刻目突帯が貼付される。残存高11.5cmを測り、褐灰色を呈する。東九州での出土量が多い下城式土器であると思われる。搬入品であろう。

2・3号土坑 出土遺物（第23図 図版12）

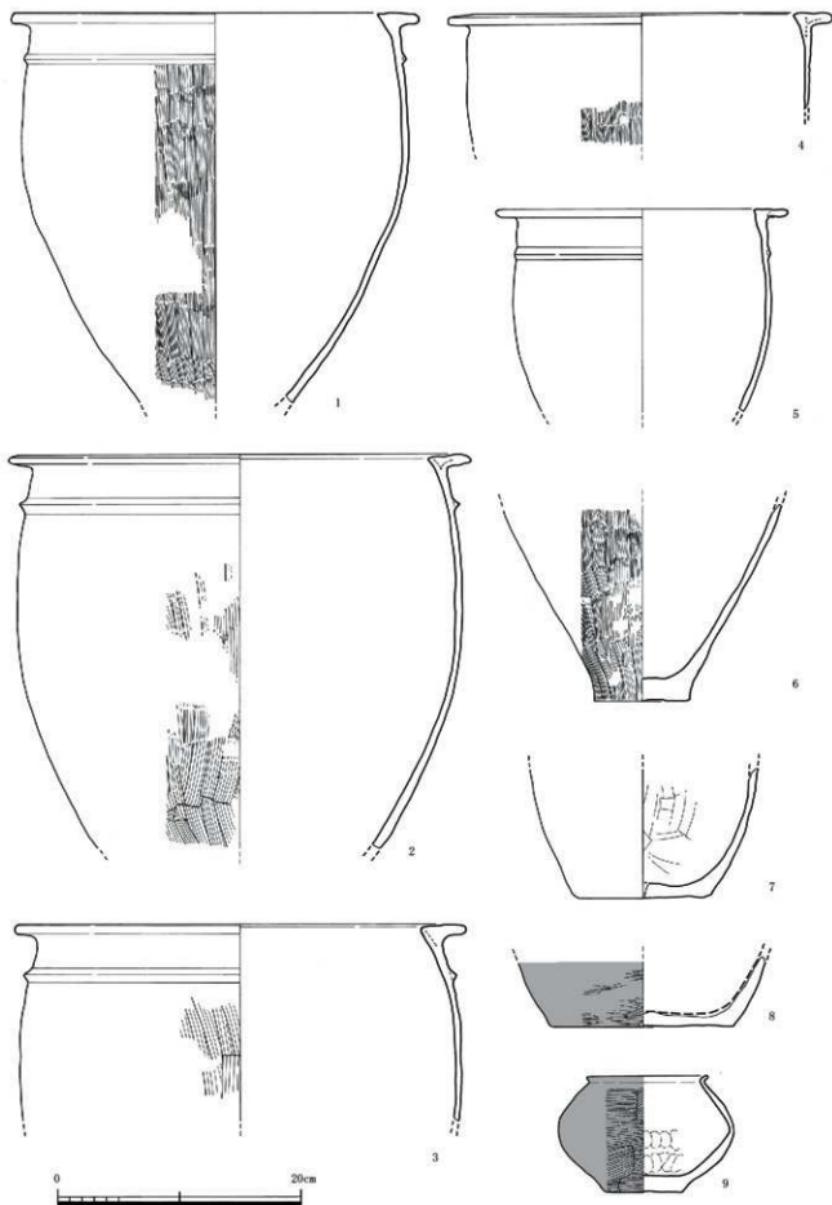
2号土坑、3号土坑は切りあっており遺物取り上げ時にどちらの土坑に帰属するか不明のものは「2・3号土坑出土」としてとりあげたためここでも遺物取り上げ時のまま報告する。第23図1は弥生土器の甕である。口径24.2cm、残存高15.2cmを測る。2は鉢で口径10.1cm、器高9.5cmを測る。外面をハケメで調整したのちナデ消しを行っている。非常に丁寧なつくりである。外面に煤が付着する。3・4は高壺の脚部である。外面はヘラミガキを密に行っている。3は外面に黒色顔料を、4は赤色顔料を塗布している。5は器台である。受部径9.5cm、底径11.0cm、器高14.3cmを測る。外面はハケメ、内面をナデにより調整を行う。6は支脚である。

【II-B区】（図版8）

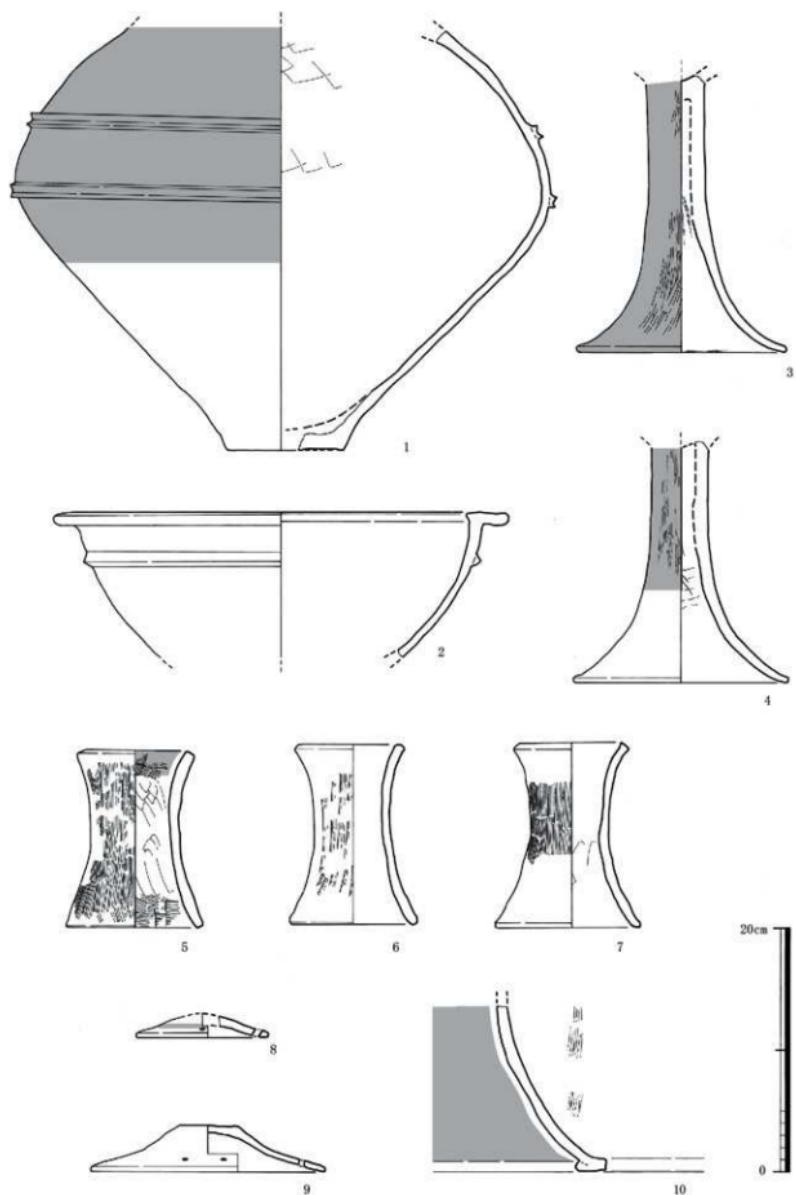
II-B区はII-A区の南側に位置する調査区である。重機による掘削を行ったが地表下約1mのところで基盤層を確認した。調査区の東側は擾乱により削平を受けており、西側の一部に堆積層を確認することができた。重機掘削後、遺構検出を行い数か所の窪みを確認したが埋土の状況からすべて擾乱に伴うものであり、遺構は検出できなかった。



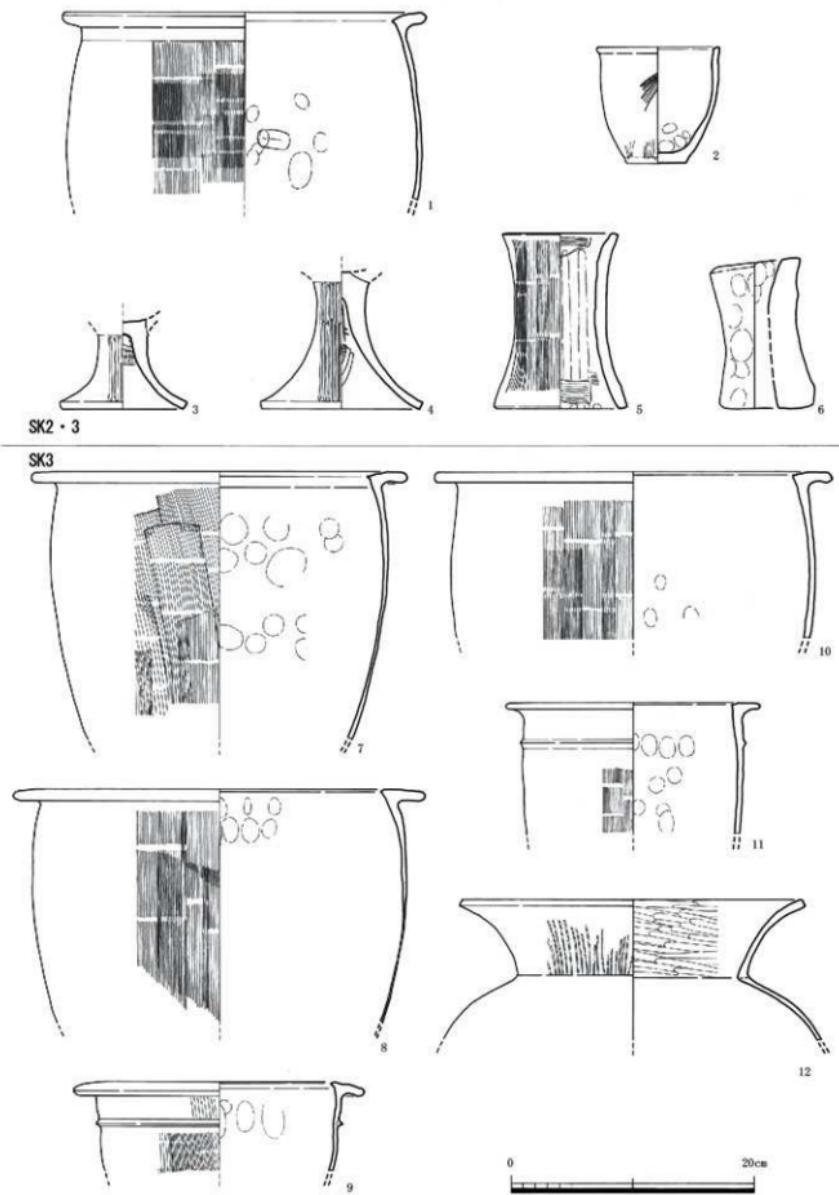
第20図 II-A区 1・2・3号土坑 実測図 ($S = 1/40$)



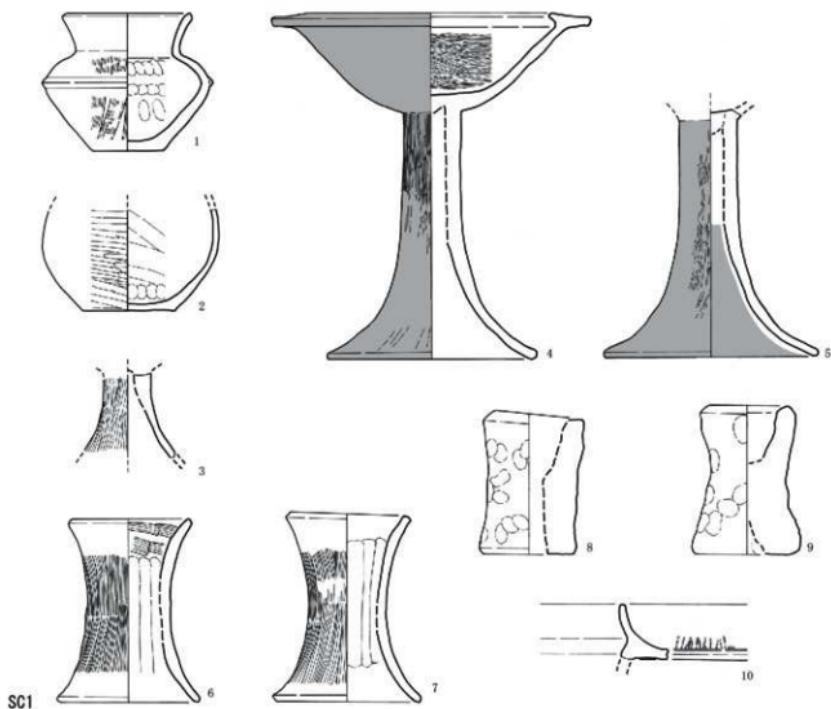
第21図 II-A区 2号土坑出土土器 実測図① ($S = 1/4$)



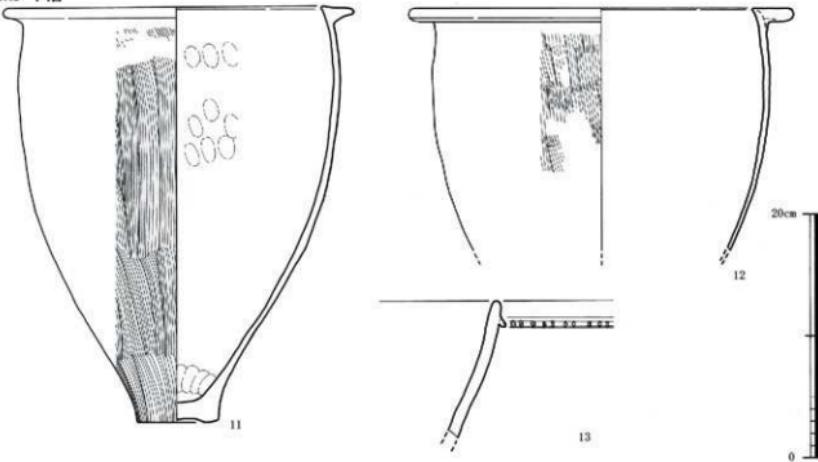
第22図 II-A区 2号土坑出土土器 実測図② ($S = 1/4$)



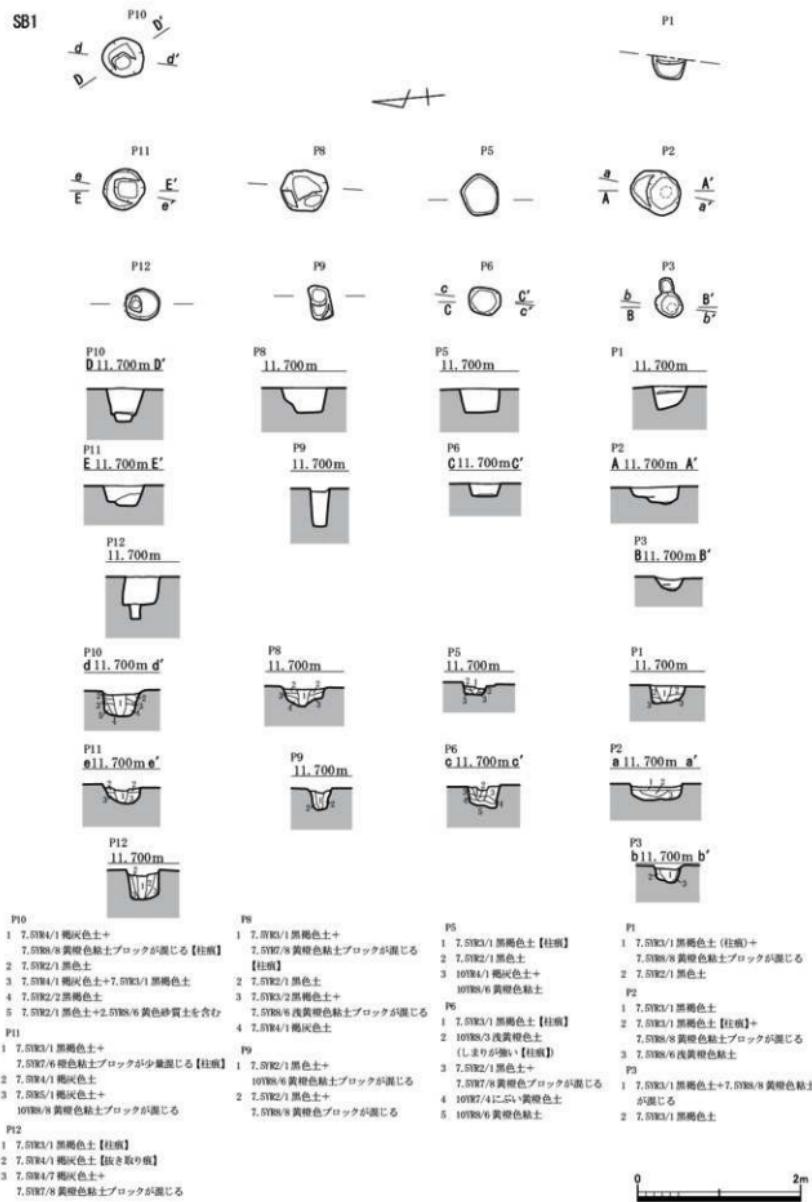
第23図 II-A区 2・3号土坑、3号土坑出土土器 実測図 ($S = 1/4$)



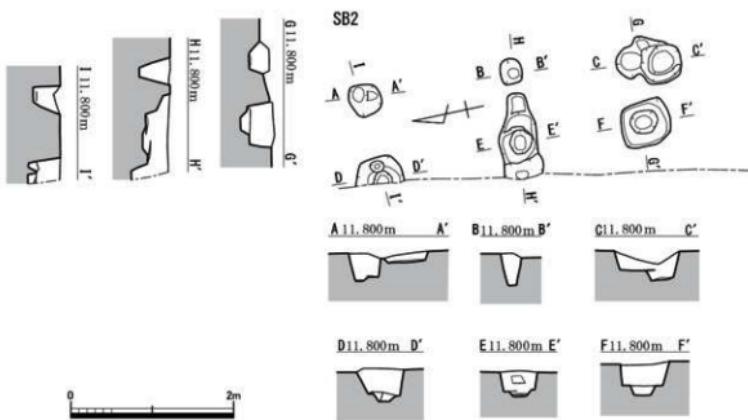
SK3 下層



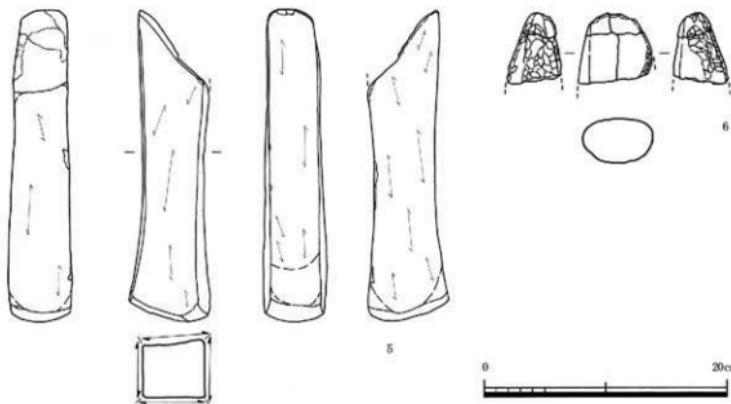
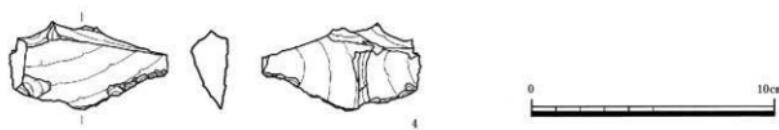
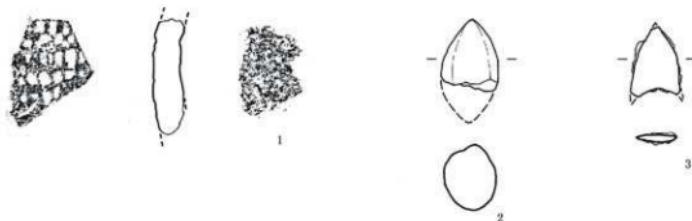
第24図 II-A区 3号土坑、3号土坑下層出土土器 実測図 ($S = 1/4$)



第25図 II-A区 1号掘立柱建物 実測図 (S = 1/60)



第26図 II-A区 2号掘立柱建物 実測図 ($S = 1/60$)



第27図 I・II区 出土土器、鉄器、石器 実測図 (1~4 : S = 1/2, 5・6 : S = 1/4)

第4章 総括

本調査では、I 区で、堅穴住居 2 軒、土坑 10 基、溝 8 条、小児甕棺墓 1 基、土坑墓 1 基、柵列 2 条を確認した。さらに II 区では土坑 3 基（うち 2 基は祭祀土坑）、廂付掘立柱建物 2 棟を確認した。ここでは本調査の成果を周辺調査区との関係性を見ていきたい。

まず注目される点として、弥生時代中期の環濠を検出したことである。長さは約 28m にも及び、幅は最大 2.9m、深さ 1m を測り、断面は V 字である。土層観察により 3 回は掘り直しを行っており、I -B 区西側では複数の床面を確認している。また I -B 区東側では環濠を黄褐色の粘土質の土で丁寧に埋め立てた後北側を再度掘削するなど特異な様相を見せる。さらに掘削した床面に頸部～口縁部を打ち欠いた甕を据え置いている。環濠の時期は弥生時代中期前葉の土器が中心であり、弥生時代中期後葉の土器も含まれる。弥生時代中期前葉に環濠を掘削し、再掘削を行いながら中期後葉には埋没したと考えられる。環濠の南側は同時期の遺構密度が比較的高いのに対し、環濠の北側では同時期の遺構密度が低い。集落を区画する意味合いがあったと考えられる。

調査区の西側に隣接する 1 次調査でも環濠の延長部分を確認している。1 次調査 I 区北側で確認し、長さは約 35m を測る。全掘しているわけではないためすべての様相は不明であるが深さは最高で 2m、幅は 3m を測る。環濠の機能については、北側に続く台地を切断するためのもので、集落を区画する意味合いがあったとされ（『小郡市史 第四巻 資料編 原始・古代』2001）、今回の調査成果も先の指摘を補足する結果となった。さらには環濠の周辺では甕棺墓や小児甕棺墓が確認されている。本調査区でも小児甕棺墓と小児用の土壙墓を確認しており、環濠の周辺に甕棺墓や土壙墓を築く様相は大板井遺跡の特徴といえよう。

さらに大板井遺跡の環濠については詳細な検討が行われている（『小郡市史 補遺編』2017）（第 28 図）。環濠の続きを 19 次調査区 5 号溝、18 次調査区 E 地点の 2 号溝状遺構、4 次調査区 b 区、19 次調査の 5 号溝がそれにあたる。環濠は 15 次調査区で発見された崖面へ続き、西側は谷部へとつながっていくことが指摘され、弥生時代中期の大板井遺跡の中心部と考えられる範囲は環濠と西側谷部で囲まれていた部分であることが想定されている。今後の調査成果に期待である。

II -A 区では祭祀土坑を確認している（2・3 号土坑）。土坑からは多くの遺物が出土しており、時期は弥生時代中期前葉から中期後葉の土器が多く、一部中期末の土器を少量含んでいる。最下層からは弥生時代中期前葉の土器が出土している。このことから弥生時代中期前葉に掘削し、複数回祭祀を行ながらも弥生時代中期末に埋没したと考えられる。また最下層からは弥生時代中期前葉の土器とともに東九州での出土が多い下坂式の甕が出土している。在地の弥生土器と比較すると器壁が厚く、色調も他の土器と比べて異なっており、搬入品の可能性が高い。

次に古代に目を向けていきたいと思う。本調査区の北西には小郡官衙遺跡が所在し、7 世紀後半から 8 世紀前半の時期に盛行する。本調査区でも I 区を中心に 7 世紀後半から 8 世紀前半の遺構が確認されている。さらに II 区では時期は不明であるが廂付掘立柱建物が 2 棟確認している。さらに周辺の調査区を見るに周辺調査区も同時期の遺構を確認しており、10 次調査区で「正倉」とみられる 3 × 4 規模の掘立柱建物や 18 次調査で官衙の正倉群やその関連施設と推定される版築状盛土などが確認されている。小郡官衙遺跡に近いこの地は 7 世紀後半から 8 世紀前半にも盛行したと考えられる。

第28図 大坂井遺跡周辺調査地検出遺構 (S = 1/1000)

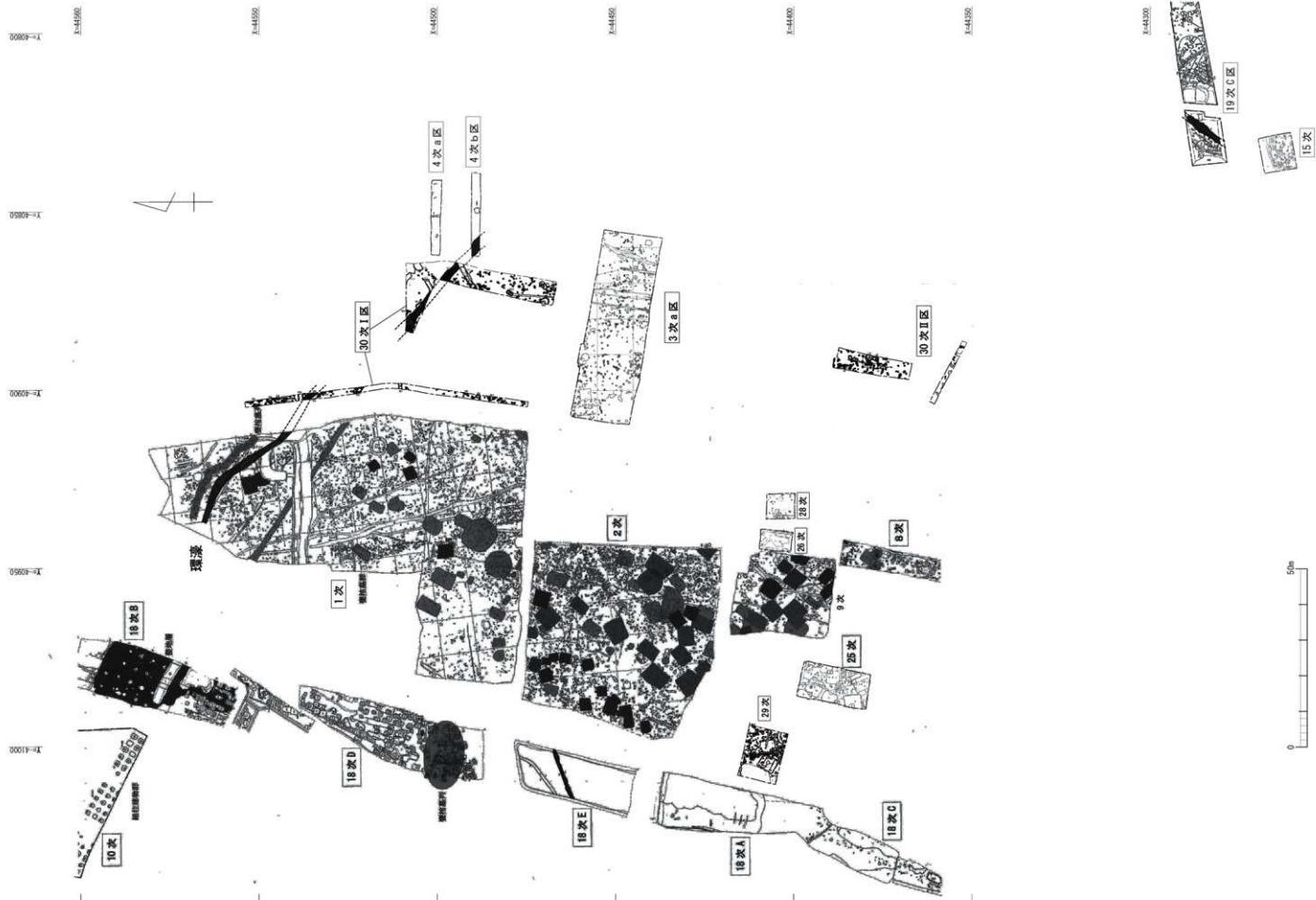


表 1 大板井遺跡 30 出土遺物觀察表

法量=口：口径、底：底面直径、旁：受皿径、高：高さ、底：底径、高：高さ、底：底面直径、体：体部最大径、つまみ：つまみ天：火鉢径、御器：御器底径、基：基部
器種=手：手造土器、土：土器類、瓦：瓦器

地図番号	図版番号	出土遺構	器種	法量 cm ³ (復元値)	色調	出土	備成	成形・調整方法	備考	測定値
第9闕1		I-A区 SC1	鍋底下 部・側	残存高:4.0 底:(7.4)	淡黄褐色	砂粒を含む	良好	口～頸：ヨコナダ 体・内：ナダ 体・外：ハケメ 他はナダ		1
第9闕2		I-A区 SC1	鍋底下 部・側	残存高:4.1 底:(7.4)	内：黒褐色 外：にぶい黄褐色	砂粒を含む	良好	体・外：ハケメ 他はナダ	外面にスズ。	2
第9闕3		I-A区 SC2	サブト 部・側	残存高:3.9	淡黄褐色	砂粒を含む	良好	ヨコナダ		2
第9闕4		I-A区 SC2	サブト 部・側	残存高:2.6	褐色	砂粒を含む	良好	ヨコナダ		1
第9闕5		I-A区 SC2	サブト 部・側	残存高:4.7 底:7.6	内：褐～黑色 外：褐色	砂粒を含む	良好	体・外：ヘラカギメ 他はナダ		4
第9闕6	国版9	I-A区 SC2	部・側	天:(7.25) 残存高:5.6	褐色	砂粒を含む	良好	体・外：ハケメ 他はナダ		3
第9闕7		I-A区 SK2	部・側	残存高:3.3	内：浅黄褐色 外：灰褐色	砂粒を含む	良好	小口 不直	表面摩滅のため調整不明	1
第9闕8	国版9	I-A区 SK5	部・側	口:(33.4) 残存高:6.5	内：灰白色 外：浅黄褐色	砂粒を含む	良好	口～頸：ヨコナダ 体・内：ナダ 体・外：ハケメ	粘土帶ごとに割れている。	1
第9闕9		I-A区 SK6	土・鉢	口:(31.2) 残存高:6.2	内：灰～黒褐色 外：黒褐色	砂粒を含む	良好	口：ヨコナダ 体・内：ヘラカギメ 外：粗ハケメ		3
第9闕10		I-A区 SK6	土・側	残存高:4.5	褐色	砂粒を含む	良好	口・内：ナダ 口・開口・外：ヨコナダ 内：ヘラカギメ		2
第9闕11		I-A区 SK6	土・鉢	口:(11.40) 残存高:3.1	内：灰白色 外：灰褐色	砂粒を含む	良好	同軸ナダ	体部外縁の一部に自然輪。	5
第9闕12	国版9	I-A区 SK6	土・高台 付属	残存高:2.4 高:(9.3)	内：褐～浅黄褐色	砂粒を含む	良好	底：ナダ 他は同軸ナダ		4
第9闕13		I-A区 SK6	部・側	口:(21.2) 残存高:10.9	内：褐色 外：浅黄褐色	砂粒を含む	良好	口：ヨコナダ 内：タテナダ 他はナダ	丁寧なつくり。	1
第9闕14		I-A区 SK6	足下部 部・側	残存高:4.2 底:7.4	内：褐色 外：黄褐色	砂粒を含む	良好	体・外：ハケメ 内：ヨコナダ	外面にスズ。	1
第9闕15	国版9	I-A区 SB2	土・杯	残存高:1.3	内：浅黄褐色 外：褐色	砂粒を含む	良好	近・外：同軸ヘラカギメ 内：ヨコナダ		4
第9闕16	国版9	I-A区 SD6	部・側	残存高:7.0	内：にぶい褐色 外：灰褐色～浅黄褐色	砂粒を含む	良好	体・外：ハケメ 内：淡褐色 他はヨコナダ		1
第9闕17		I-A区 SD6	部・側	残存高:5.4	内：灰褐色 外：灰褐色～黒褐色	砂粒を含む	良好	体・外：ハケメ 内：ヨコナダ 他はナダ	外縁にスズ。	3
第9闕18		I-A区 SD6	部・側	残存高:5.3	内：灰褐色～黒褐色 外：浅黄褐色	砂粒を含む	良好	口：ヨコナダ 体・内：ナダ 体・外：ハケメ後丁寧なナダ		2
第9闕19		I-A区 SD6	部・底	残存高:14.2 底:7.4	内：浅黄褐色 外：灰白色	砂粒を含む	良好	体・外：ハケメ後丁寧なナダ 内：ナダ 他はナダ	とても丁寧なつくり。	6
第9闕20		I-A区 SD9	部・側	残存高:3.4	内：浅黄褐色 外：黃褐色	砂粒を含む	良好	ヨコナダ	白線部周辺に削目。 体部外縁に縞文。	1
第10闕	国版10	I-A区 ST1	上縁 部・側	天:7.9 高:39.65 口:35.65	内：橙～にぶい橙 外：褐色	砂粒を含む	良好	口：ナダ 底・外：ハケメ後ナダ 体・内：板状工具ナダ 体・外：ハケメ 底：ナダ		
第10闕	国版10	I-A区 ST1	下縁 部・側	口:34.95 底:30.0 高:7.6	内：浅黄褐色 外：黄褐色	砂粒を含む	良好	口：ナダ 外：ハケメ後ナダ 内：ナダ 他はナダ		
第14闕1	国版9	I-B区 SK4	部・蓋	口:(12.4) 残存高:1.2	内：褐色 外：黄褐色	砂粒を含む	良好	同軸ナダ		3
第14闕2		I-B区 SK4	土・側	口:(24.8) 残存高:7.5	内：淡褐色 外：浅黄褐色	砂粒を含む	良好	口：ヨコナダ 体・内：ヘラカギメ 体・外：ハケメ		1
第14闕3		I-B区 SK8	西半 部・底	口:(14.4) 残存高:1.7	内：褐色 外：灰褐色	砂粒を含む	良好	同軸ナダ		27
第14闕4	国版9	I-B区 SK8	西半 部・底	口:(10.32) 残存高:1.7	内：灰白色 外：灰褐色	砂粒を含む	良好	天・外：同軸ヘラカギメ 内：ヨコナダ		26
第14闕5		I-B区 SK8	東半 部・底	口:(12.2) 残存高:5.1 底:(8.2)	内：灰褐色 外：灰白～灰褐色	砂粒を含む	良好	底・外：同軸ヘラカギメ 内：ヨコナダ		22
第14闕6		I-B区 SK8	西半 土・底	口:(13.0) 高:2.6	褐色	砂粒を含む	良好	表面摩滅のため調整不明		15
第14闕7		I-B区 SK8	西半 土・底	口:(13.8) 高:3.6 底:(10.2)	内：浅黄褐色 外：黄褐色～浅黄褐色	砂粒を含む	良好	底・外：同軸ヘラカギメ 内：ヨコナダ		16
第14闕8	国版9	I-B区 SK8	西半 土・側	口:(20.2) 残存高:2.5	内：浅黄褐色 外：黄褐色	砂粒を含む	良好	体・内：ヘラカギメ 外：ヨコナダ		2
第14闕9	国版9	I-B区 SK8	西半 土・側	口:(24.1) 残存高:7.9	褐色	砂粒を含む	良好	口：ナダ 口・開口・外：ヨコナダ 内：ナダ 他：ヘラカギメ		1
第14闕10	国版9	I-B区 SK9	部・底	口:(16.8) 高:2.3	灰白色	砂粒を含む	良好	底・外：同軸ヘラカギメ 内：ヨコナダ	内面に炭化物？付着。	7
第14闕11	国版9	I-B区 SK9	部・杯	口:(19.0) 残存高:2.5	灰白色	砂粒を含む	良好	同軸ナダ		6
第14闕12	国版9	I-B区 SK9	土・側	口:(16.2) 残存高:4.8	褐色 外：黒褐色～灰褐色	砂粒を含む	良好	口～頸：ナダ 体・内：ヘラカギメ 体・外：ハケメ	体部外縁下にスズ。	1

第 14 図 13	國版 9	I - B 区	SK10	-	部・機	D1 : (30.7) 残存高 : 29.0	内：黄褐色 外：淡黄色	砂輪を含む	良好	口：ヨコナデ 体・外：ハケメ後ナデ 体・外：ハケメ 体・外：ナデ	1	
第 14 図 14		I - B 区	SK10	西手	部・機	残存高 : 25.5	内：淡黄色 外：淡黄色	砂輪を含む	良好	器具磨滅のため調整不明	4	
第 14 図 15		I - B 区	SK10	土壁④	部・機	残存高 : 6.0	内：にぶい黄褐色 外：淡黄色	砂輪を含む	良好	体・内：ナデ 他はヨコナデ	非常に丁寧なつくり。	
第 14 図 16	國版 9	I - B 区	SK10	土壁⑤	部・機	D1 : 15.6 残存高 : 16.7	内：黄褐色 外：灰白～黒褐色	砂輪を含む	良好	体・外：ハケメ 他はヨコナデ	天井深外側に種子妊娠。	
第 14 図 17		I - B 区	SK11	-	土・杯	D1 : (14.7) 残存高 : 12.5	内：淡褐色 外：にぶい褐色	砂輪を含む	良好	底・外：手持ちヘラケズリ 他はヨコナデ	2	
第 14 図 18		I - B 区	SK11	-	土・機	D1 : (14.7) 残存高 : 13.9	内：にぶい水褐色 外：灰褐～黒褐色	砂輪を含む	良好	口：ヨコナデ 体・内：底・内：ヘラケズリ 体・外：底・外：ハケメ	1	
第 14 図 19	國版 9	I - B 区	SK12	是下層	部・器皿	D1 : (17.1) 残存高 : 6.9	浅黄色	砂輪を含む	良好	体・外：ハケメ後丁寧なナ デ 他はヨコナデ	1	
第 18 図 1	國版 9	I - B 区	SD4	北側	部・機	D1 : (28.2) 残存高 : 11.1	内：褐色 外：淡褐色～淡赤褐色	砂輪を含む	良好	口～底：ヨコナデ 体・内：ナデ 体・外：ハケメ	外面には二度焼成に伴う赤 変、器具磨滅が見られる。	
第 18 図 2	國版 9	I - B 区	SD4	北側	部・機	D1 : (37.6)	褐色	砂輪を含む	良好	口～頂：ヨコナデ 体・内：ナデ 体・外：ナデ 他はヨコナデ	4	
第 18 図 3	國版 9	I - B 区	SD4	南側	部・機	残存高 : 23.8 底 : 2	内：淡黄褐色 外：相違一黑褐色	砂輪を含む	良好	体・外：ハケメ 他はヨコナデ	9	
第 18 図 4	國版 10	I - B 区	SD4	北側	部・機	残存高 : 9.2 底 : 17.4	内：樹皮色 外：明褐色	砂輪を含む	良好	体・外：ハケメ 他はヨコナデ	10	
第 18 図 5	國版 10	I - B 区	SD4	北側	部・機	残存高 : 6.4	内：灰白色 外：にぶい褐色	砂輪を含む	良好	内：ナデ 体・外：ハケメ 他：ヨコナデ	2	
第 18 図 6	國版 10	I - B 区	SD4	南側	部・高所	残存高 : 13.6 底 : (19.7)	褐色	砂輪を含む	良好	脚・外：ヘラミガキ 他はヨコナデ	外面にスリップか?	
第 18 図 7	國版 10	I - B 区	SD4	是下層	部・進	D1 : (17.1) 高 : 25.6 体 : (高さ 5.5) 底 : 7.2	内：にぶい黒～黒 褐色 外：暗～黑色	砂輪を含む	良好	口：打球次第 体・外：ヘラミガキ(板が 広いものは板状工具の可 能性あり) 他はヨコナデ	体部外面下半～底部外面に 黒斑。	
第 18 図 8		I - B 区	SD4	北側	部・亂形 土器	残存高 : 5.6	内：黄褐色 外：黒褐色	砂輪を含む	良好	内：ナデ：板状工具ナデ 外：ヨコナデ	体部外面に縫合。 接着できない同一個体片あ り。	
第 18 図 9	國版 10	I - B 区	SD4	北側	部・ミニ	D1 : 7.0 高 : 5.0 底 : (高さ 3.5) 厚 : 0.5	淡黃褐色	砂輪を含む	良好	ヨコナデ	内面に黒斑。	
第 18 図 10	國版 10	I - B 区	SD6	上層	器・杯	D1 : (13.0) 高 : 3.6	灰色	砂輪を含む	良好	脚・外：回転ヘラケズリ or 同上・ナデ切り 他はヨコナデ	2	
第 21 図 1		B 区	SK2	-	部・機	D1 : (33. 6) 残存高 : 31.6	内：淡黄褐色～黒灰 色 外：淡黄褐色～灰 褐色	積織	良好	口～底：ヨコナデ 体・内：板状工具ナデ 体・外：ハケメ	体部外面にスス付着。	
第 21 図 2	國版 10	B 区	SK2	-	部・機	D1 : (38.0) 残存高 : 32.1	内：樹皮色 外：淡黄褐色～に ぶい黄褐色	積織 1mm以下の砂 輪をごくわ ずかに含む	良好	口～底：ヨコナデ 体・内：板状工具ナデ 体・外：ハケメ	体部外面にスス付着。	
第 21 図 3	國版 10	B 区	SK2	-	部・機	D1 : (33.2) 残存高 : 16.1	内：にぶい黄 褐色 外：にぶい黄褐色	積織 1mm以下の砂 輪をごくわ ずかに含む	良好	口～底：ヨコナデ 体・内：板状工具ナデ 体・外：ハケメ	内面の一部が黒変。	
第 21 図 4	國版 10	B 区	SK2	-	部・機	D1 : (24.0) 残存高 : 16.45	内：褐色 外：深～黒褐色	積織 1mm以下の砂 輪をごくわ ずかに含む	良好	口：ヨコナデ 他は板状工具ナデ	口縁部～体部外面にかけて 黒変。 体部内部中位附近に打ち 欠き多数。	
第 21 図 5	國版 10	B 区	SK2	-	部・機	D1 : 31.4 残存高 : 16.7	内：にぶい黄褐色 外：灰褐色 外：にぶい黄褐色	積織 1mm以下の砂 輪をごくわ ずかに含む	良好	体・外：中位はハケメ 他はヨコナデ	5	
第 21 図 6	國版 10	B 区	SK2	-	部・機	内：にぶい黄褐色 外：灰褐色 外：にぶい黄褐色	積織 1mm以下の砂 輪をごくわ ずかに含む	良好	体・内：器具磨滅のため調 整不能 体・外：ハケメ 他は板状工具ナ デ 底・外：ナデ	体部外面中位にスス、中位 と底部との境付近は二度燒 成のため変色。		
第 21 図 7	國版 10	B 区	SK2	-	部・機	残存高 : 10.5 底 : 10.2	内：にぶい黄褐色 外：灰褐色 外：にぶい黄褐色	積織 1.5mm以下の 砂輪をごくわ ずかに含む	良好	底部外面は黒斑。 体部外面中位にスス。	16	
第 21 図 8	國版 10	B 区	SK2	-	部・機	残存高 : 5.7 底 : 5.1	内：明黄褐色 外：にぶい黄褐色	積織 1.5mm以下 の砂輪をごくわ ずかに含む	良好	内：器具磨滅のため調整不 可能 他はヘラミガキ	12 底部研磨。 体部外面と底部外面の境に 黒斑。	
第 21 図 9	國版 10	B 区	SK2	-	部・無蓋	D1 : 10.0 高 : 9.8 体 : (高さ 6.5) 底 : 6.5	内：褐色 外：明赤褐色	砂輪を含む	良好	脚・外：ヘラミガキ 他はナデ	18	
第 22 図 1	國版 11	B 区	SK2	-	部・底	D1 : (突起) : 25.05 残存高 : 24.3 底 : 0.80	内：にぶい黄褐色	積織 1mm以下の砂 輪をごくわ ずかに含む	良好	板状工具ナデ	SK2 下層、SK2・3 出土片と 接合。 体部外面に黒色顔料→黒色 土器。	21

第22回2	国版11	B区	SK2	-	歩・跡	口:(37.85) 残存高:12.6	淡黄褐～褐灰色 内:淡黄褐	種類: 1mm以下の砂 粒をごくわ ずかに含む	良好	口・足:ヨコナデ 体・内:上半はコナデ、下 半は板状工具ナデ 体・外:器具摩擦のため調 整不明	口縫部へ体部外側中位は黒 色。	22
第22回3	国版11	B区	SK2	-	歩・高杯	残存高:(17.4) 脚幅:(17.4)	内:にぶい褐色 外:淡黄褐色	種類: 1mm以下の砂 粒をごくわ ずかに含む	良好	軸・内:器具摩擦のため調 整不明 脚・内:底部はヘラミガキ? 他の器具摩擦のため調整不 明 脚・外:ヘラミガキ? 器具 摩擦のため不明 脚・端:ヨコナデ?	丹波磨研究室。	23
第22回4	国版11	B区	SK2	-	歩・高杯	残存高:(19.55) 脚・ 幅:(17.85)	褐色	種類: 1mm以下の砂 粒をごくわ ずかに含む	良好	軸・内:器具摩擦のため調 整不明 脚・外:ヘラミガキ? 装 置摩擦のため不明 脚・端:ヨコナデ?	丹波磨研究室。	24
第22回5	国版11	B区	SK2	-	歩・跡台	口:9.7 高:14.5 底:11.2	にぶい黃褐色	種類: 1mm以下の砂 粒をごくわ ずかに含む	良好	軸:ヨコナデ 体・内:板状工具ナデ 他はハケメ		29
第22回6	国版11	B区	SK2	-	歩・跡台	口:9.05 高:14.8 底:10.6	褐色	種類: 1mm以下の砂 粒をごくわ ずかに含む	良好	軸:ヨコナデ 体・内:板状工具ナデ 他はハケメ	体部外面にスス付着。	30
第22回7	国版11	B区	SK2	-	歩・跡台	口:9.4 高:15.2 底:12.1	にぶい褐色	種類: 1mm以下の砂 粒をごくわ ずかに含む	良好	軸:ヨコナデ 体・内:板状工具ナデ 他はハケメ		31
第22回8	国版11	B区	SK2	-	歩・無頭 膝盖	口:(11.05) 残存高:11.8	淡黄～黃灰色	種類: 3mm以下の砂 粒をごくわ ずかに含む	良好	口・端:ナデ 他はヘラミガキ、器具摩 擦のため不明	体部外面に赤色のもの 付着。口縫部端部は黒変。	28
第22回9	国版11	B区	SK2	-	歩・無頭 膝盖	口:(19.4) 高:3.8 底:4.7	淡黄褐色	やや粗 1mm以下の砂 粒をやや多 く含む	良好	器具摩擦のため調整不明		27
第22回10	国版11	B区	SK2	-	歩・箇形 跡台	残存高:13.6	内:相～淡黄褐色 外:褐色	種類: 1mm以下の砂 粒をごくわ ずかに含む	良好	軸・外:ヘラミガキ 体・内:板状工具ナデ 脚・端:ヨコナデ	丹波磨研究室。	32
第23回1	国版12	B区	SK2+/- 3	-	歩・跡	口:(24.2) 残存高:15.2	内:にぶい黄～黄 外:褐色 黄褐色	種類: 3mm以下の砂 粒をやや多 く含む	良好	口:ヨコナデ 体・内:上位は器具摩 擦のため調 整不明、中位はナデ 体・外:ハケメ		1
第23回2	国版12	B区	SK2+/- 3	-	歩・跡	口:10.1 高:9.5 底:5.1	褐色	砂粒を含む	良好	口:ヨコナデ 体・外:ハケメ 軸はナ	底部外面にスス。	5
第23回3	国版12	B区	SK2+/- 3	+ベルト	歩・高杯	残存高:7.4 脚幅:(10.5)	内:相～褐色 外:褐色	種類: 3mm以下砂粒 をごくわず かに含む	良好	軸・内:器具摩擦のため調 整不明 軸・外:上半はナデ、下半 はヨコナデ 脚・外:ヘラミガキ 脚・端:ヨコナデ		6
第23回4	国版12	B区	SK2+/- 3	-	歩・高杯	残存高:11.2 脚幅:(13.4)	内:褐色 外:明赤褐色	種類: 1mm以下砂粒 をごくわず かに含む	良好	軸・内:器具摩擦のため調 整不明 脚・内:上位はナデ、中位 ～下位は板状工具ナデ 脚・外:ヘラミガキ 脚・端:ヨコナデ		7
第23回5	国版12	B区	SK2+/- 3	-	歩・跡台	口:(9.5) 高:(11.0)	にぶい黃～明黃 褐色	やや粗 1mm以下の砂 粒をやや多 く含む	良好	受・端・底・端:ナデ 軸・内:上位と下位はハケメ、 中位はナデ 体・外:ハケメ		9
第23回6	国版12	B区	SK2+/- 3	-	歩・支柱	口:7.48 高:12.2 底:7.7	にぶい黃～暗赤 褐色	砂粒を多く 含む	不良	受・端・底・端:ナデ 軸・内:上位はナデ 体・外:ナデ 他は器具摩 擦のため調 整不明		11
第23回7	国版12	B区	SK3	-	歩・跡	口:(31.0) 残存高:21.9	内:淡黄～黃灰色 外:にぶい褐色	ほぼ密 4mm以下の砂 粒を少し含む	良好	口:ヨコナデ 体・内:当て具履(無文) 体・外:ハケメ		4
第23回8	国版12	B区	SK3	-	歩・跡	口:(34.0) 残存高:19.2	にぶい黃褐色	種類: 2mm以下砂粒 をごくわず かに含む	良好	口:ヨコナデ 体・内:器具摩擦のため調 整不明 体・外:ハケメ		2
第23回9	国版12	B区	SK3	-	歩・跡	口:(34.0) 残存高:17.2	淡黄褐色	やや粗 4mm以下の砂 粒をやや多 く含む	良好	軸・外:ハケメ 軸はヨコナデ		3
第23回10	国版12	B区	SK3	-	歩・跡	口:(32.8) 残存高:13.6	内:黒褐色 外:にぶい褐色	種類: 2mm以下砂粒 をごくわず かに含む	良好	口:ヨコナデ 体・内:上位は器具摩 擦のため調 整不明、中位はナデ 体・外:ハケメ		1
第23回11	国版12	B区	SK3	-	歩・跡	口:(21.0) 残存高:10.7	内:にぶい黃褐色 外:淡黄褐色～褐色	種類: 2mm以下砂粒 をごくわず かに含む	良好	口: 黒:ヨコナデ 体・内:ナデ 体・外:ハケメ	内面に黒斑。	5

第23回12	國版11	B区	SK3	-	鉢・底付 高	D : (26.5) 残存高 : 11.6	内 : 淡い褐色 外 : 浅黄褐色	砂粒を含む	良好	口・縁 : ヨコナダ 体・内 : ハラミガキ 体・外 : 器表摩擦のため調 整不明 体 : ナダ	頭部外面に埋文。	10
第24回1	國版11	B区	SK3	-	鉢・底付 高	D : (10.6) 高 : 11.2 突 : (14.1) 底 : (5.9)	内 : 灰白色 外 : 浅黄褐色	砂粒を含む	良好	口・縁 : 黒 : ヨコナダ 体・外 : 上位はハケメ後ヨコ ナダ 中位～下位はハケメ後ヨコ ナダ 他はナダ	9	
第24回2	國版11	B区	SK3	-	鉢・底付 高	D : (14.5) 高 : 7.81	内 : 灰褐色 外 : 黑褐色～褐色	砂粒を含む	良好	口・縁 : 黒 : ヨコナダ 体・外 : ハラミガキ 他はナダ	SK2、SK2・3出土片と接合。 体部外面に黒斑。	11
第24回3	國版11	B区	SK3	-	鉢・底付 高	D : (26.7) 高 : 7.0	内 : 淡赤褐色 外 : 棕色	砂粒を含む	やや不良	口・縁 : ヨコナダ 体・外 : ハラミガキ	12	
第24回4	國版11	B区	SK3	-	鉢・底付 高	D : (29.2) 高 : 17.7	褐色	砂粒を含む	良好	口・縁 : ヨコナダ 体・外 : 上位～中位はハラ ミガキ 中位～下位は器表摩擦のため調 整不明	頭部内部中位～頭部外面上 丹巻り・丹能磨研石跡。	14
第24回5	國版12	B区	SK3	-	鉢・高所 高	D : (26.4) 高 : 28.25 厚 : 17.35	褐色	砂粒 1mm 以下砂粒 をこくねず かに含む	良好	口・縁 : ヨコナダ 体・外 : ハラミガキ 体・内 : 器表摩擦のため調 整不明	丹能磨研石跡。	16
第24回6	國版12	B区	SK3	-	鉢・器台 受	D : (10.2) 高 : 15.0 底 : 11.9	内 : 暗灰色 外 : 黄褐色	砂粒を含む	良好	受・縁 : 受 : ヨコナダ 内・外 : 上位と下位はヨコ ナダ 中位は工具ナダ 体・外 : 上位と下位はヨコ ナダ 中位はハケメ	遺構情況中にあり。	20
第24回7	國版12	B区	SK3	-	鉢・器台 受	D : (10.4) 高 : 15.5 底 : 12.3	内 : 淡黄褐色	砂粒 1mm 以下砂粒 をこくねず かに含む	良好	受・縁 : 受 : ヨコナダ 内・外 : 上位と下位はヨコ ナダ 中位は工具ナダ 体・外 : 上位と下位はヨコ ナダ 中位はハケメ	2下層出土片と接合。	21
第24回8	國版12	B区	SK3	-	鉢・支脚 受	D : (8.4) 高 : 11.15 底 : 8.1	褐色	砂粒を含む	良好	ナダ		24
第24回9	國版12	B区	SK3	-	鉢・支脚 受	D : (7.9) 高 : 12.2 底 : 9.0	内 : 暗灰色 外 : 灰褐色	砂粒を含む	良好	ナダ		25
第24回10	國版12	B区	SK3	-	鉢・筒形 高	D : (4.5) 残存高 : 4.5	褐色	砂粒を含む	良好	口 : 下側はナダ 他はヨコナダ	口縫部外面～背落上面に埋 文。	22
第24回11	國版12	B区	SK3	下層	鉢・底付 高	D : (34.1) 高 : 6.8	内 : 淡黄褐色～黒褐色 外 : 暗灰～浅黄褐色	砂粒を含む	良好	口 : ヨコナダ 体・外 : ハケメ 他はナダ	90.3 出土片と接合。 体部内部下半～底部内面に ヨコナダ。体部表面中位にスス 体部外面に幾重状の破裂板 あり。	1
第24回12	國版12	B区	SK3	下層	鉢・底付 高	D : (31.8) 残存高 : 19.85	内 : 淡い褐色 外 : 棕色	砂粒 2mm 以下砂粒 をこくねず かに含む	良好	口 : ヨコナダ 体・内 : 板状工具ナダ 体・外 : ハケメ 中位は器 表摩擦のため調整不明	体部内部中位にヨコナダ。口縫 部外面～体部外面上位にスス 口縫部内部～体部内面上位 は破裂したため変形。	2
第24回13	國版12	B区	SK3	下層	鉢・鉢 底付	D : (11.5)	内 : 暗灰色 外 : 淡い黄褐色～ 淡黄褐色	砂粒を含む	良好	受 : ヨコナダ 下 : ハケメ 他はナダ	受筋部に削目。	9
第27回1	國版10	I区	SB8	上層	土・製塙 土器2	D : (4.5)	内 : 暗灰色 外 : 深褐色	砂粒を含む	良好	内 : ヨコナダ 外 : タキキ		1
第27回2	國版12	I区	SB4	北側	土・鉢 底付	D : (2.7) 厚 : 1.2 重 : 16.2g	内 : 暗褐色	砂粒を含む	良好	ナダ		1

写 真 図 版



調査区上空から小郡官衙遺跡公園を臨む

写真図版 1



①調査区全景（上空から）



②I区 調査区全景（上空から）



① I 区環濠（4・6・9号溝状造構）完掘状況（上空から）



② II 区調査区 全景（上空から）

写真図版 3



① I -A 区 1号住居



② I -A 区 1号住居 東壁土層断面



③ I -A 区 2号住居



④ I -A 区 1号土坑



⑤ I -A 区 2号土坑



⑥ I -A 区 3号土坑 土層断面



⑦ I -A 区 3号土坑



⑧ I -A 区 5号土坑 西壁土層断面



① I -A 区 5号土坑



② I -A 区 6号土坑 東壁土層断面



③ I -A 区 6号土坑



④ I -A 区 1号甕棺墓



⑤ I -A 区 2号溝状遺構



⑥ I -A 区 6・9号溝状遺構 西壁土層断面



⑦ I -A 区 6号溝状遺構



⑧ I -A 区 9号溝状遺構



① I -B 区 4号土坑



② I -B 区 8号土坑 土層断面



③ I -B 区 8号土坑



④ I -B 区 9号土坑



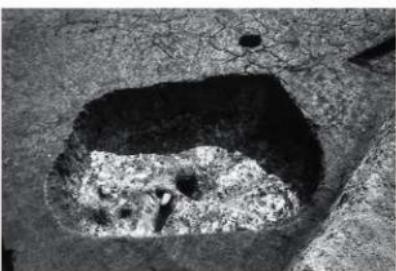
⑤ I -B 区 10号土坑 遺物出土状況



⑥ I -B 区 11号土坑



⑦ I -B 区 12号土坑 土層断面



⑧ I -B 区 12号土坑



① I -B 区 3号溝 土層断面



② I -B 区 3号溝状遺構



③ I -B 区 3・4号溝状遺構 東壁土層断面



④ I -B 区 4号溝状遺構 西壁土層断面



⑤ I -B 区 4号溝状遺構 E-E' 土層断面



⑥ I -B 区 4号溝状遺構 D-D' 土層断面



⑦ I -B 区 4号溝状遺構



⑧ I -B 区 4号溝状遺構 最下層土器 出土状况

写真図版 7



① I -B 区 4号溝状遺構西側 土層断面



② I -B 区 4号溝状遺構西側



③ II -A 区 1号掘立柱建物 檢出状況



④ II -A 区 1号掘立柱建物 (上空から)



⑤ II -A 区 1号掘立柱建物



⑥ II -A 区 1号土坑



⑦ II -A 区 2・3号土坑 遺物出土状況



⑧ II -A 区 2・3号土坑 土層断面



① II -A 区 2・3号土坑



② II -B 区 北壁土層断面



③ II -B 区 調査区全景





18-4



18-5



18-6



18-7



18-9



18-10



10- 上



27-1



21-1



10- 下



21-2



21-3



21-4



21-5



21-6



21-7



21-8



21-9

写真図版 11



22-1



22-2



22-3



22-4



22-5



22-6



22-7



22-9



22-10



23-8



23-10



23-11



SK3 出土



23-12



24-1



24-2



24-3



24-4

出土土器③



24-5



24-6



24-7



24-8



24-9



24-10



24-11



24-12



24-13



23-2



23-3



23-4



23-5



27-2



27-3



23-6



27-4



27-6



27-5

出土土器④

報 告 書 抄 錄

大板井遺跡 30

—福岡県小郡市大板井所在遺跡の調査報告—

小郡市文化財調査報告書 第357集

令和5年3月31日

発 行 小郡市教育委員会

小郡市小郡 255-1

印 刷 スマートファイブ

福岡県小郡市小郡 1572-9